別添１

千葉国際芸術祭2025
令和５年度プレ期間事業実施報告

1. アートプロジェクト：令和6年02月28日（水）「ラウンドテーブル01」
会場／千葉市美術館
2. アートプロジェクト：令和6年03月09日（日）藤浩志「かえっこin 花見川団地」
会場／花見川団地商店街
3. アートプロジェクト：令和6年03月16日（土）西尾美也「くふぅく」
会場／千葉市美術館
4. スクーリング：　令和6年02月28日（水）栗原良彰「テーマパークの模型を作ろう！」
会場／千草台小学校アフタースクール
5. アートプロジェクト：令和6年03月17日（日）栗原良彰「テーマパークの模型を作ろう！」
会場／千葉市美術館
令和6年03月13日（水）～21日（木）「作品発表会」
会場／千葉市役所
6. アートプロジェクト：令和6年03月27日（水）～04月07日（日）「Slow Art Collective Chiba」
会場／千葉センシティ

７．広報展開

１．アートプロジェクト

千葉国際芸術祭ラウンドテーブル01「なぜ千葉市に芸術祭が必要なのか？」

1. 実施概要

本ラウンドテーブルは、芸術祭本会期に向けたキックオフイベントとして位置づけ、行政の立場から千葉市長、芸術の立場から千葉市美術館館長、アーティストの立場から「かえっこ」のプロジェクトを推進する藤浩志が参加。

芸術祭総合ディレクター中村政人自らファシリテーターとして議論の舵取りを行い、登壇者以外にも市内のキーパーソンとなる7人のレスポンデントをはじめ、質疑応答では市民も議論に参加。芸術祭に期待する事柄や、千葉市の芸術文化の振興やまちづくりのビジョンについて活発な意見の交換が行われた。

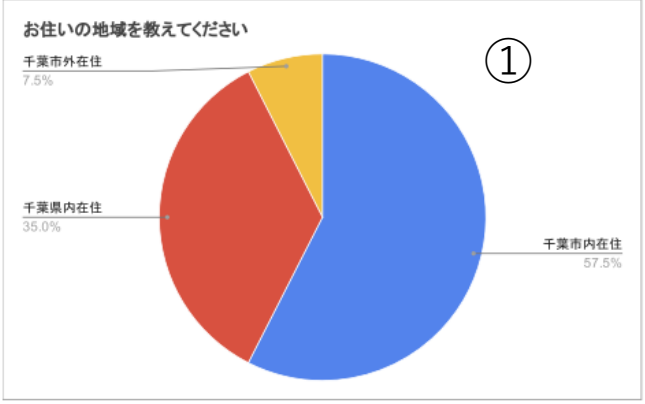
◉参加人数：のべ 73名　※定員に対し104%増

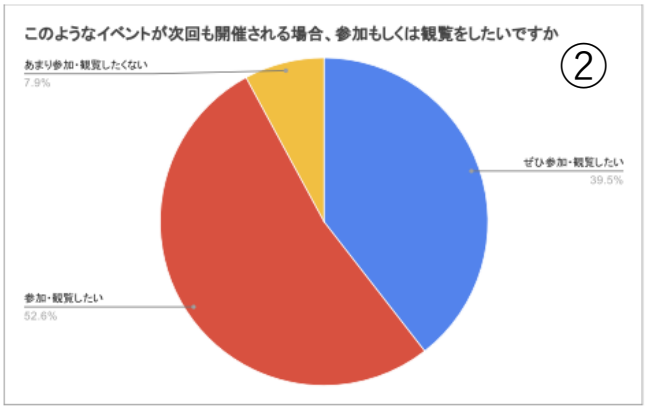
2. 開催概要

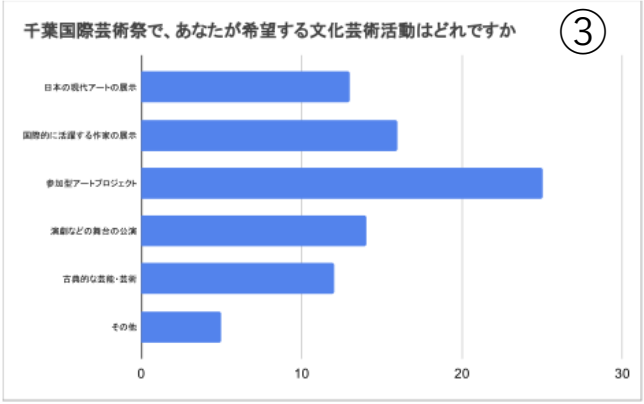
タイトル　：千葉国際芸術祭ラウンドテーブル01「なぜ千葉市に芸術祭が必要なのか？」
開催日時　：令和6年2月28日（水）10：30～12：00　※開場10：00
会　場　　：千葉市美術館　1階さや堂ホール(千葉県千葉市中央区中央3-10-8)
参加方法　：先着70人　※事前申込無し
登壇者　　：中村　政人（千葉国際芸術祭総合ディレクター）
藤　浩志（アーティスト）
山梨　絵美子（千葉市美術館館長）
神谷　俊一（千葉市長）
レスポンデント：栗原 洋一（千葉銀座商店街振興組合 理事長）
曽我辺 穣（公益財団法人 千葉市文化振興財団 理事長）
磯野 和美（千葉市文化連盟 会長）
小池 浩和（千葉都市モノレール㈱ 代表取締役社長）
小島 進一（そごう千葉店 教育推進担当 チーフトレーナー）
いわさわ たかし（アーティスト 岩沢兄弟）
西山 芽衣（株式会社マイキー ディレクター）

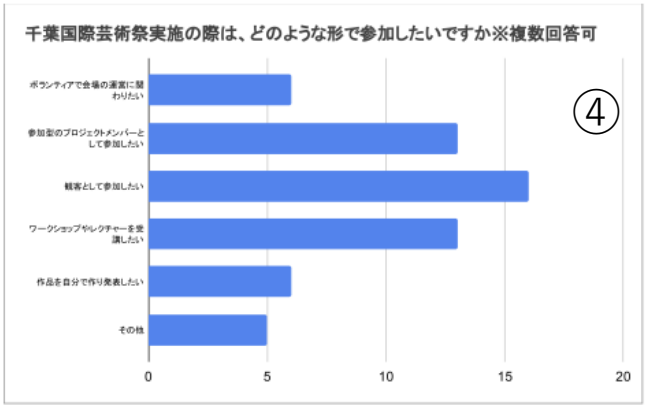
当日の会場の様子

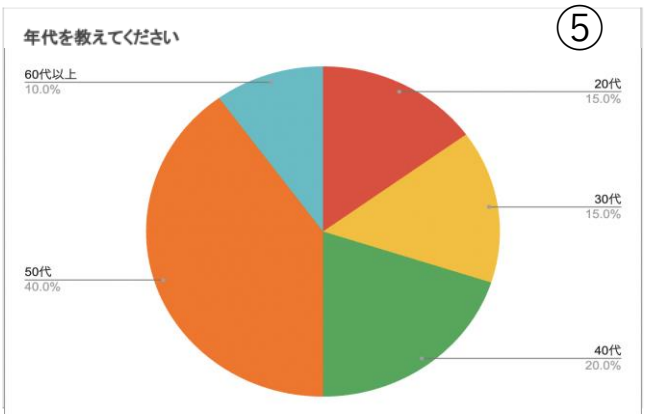
３．アンケート回答結果　取得数６１

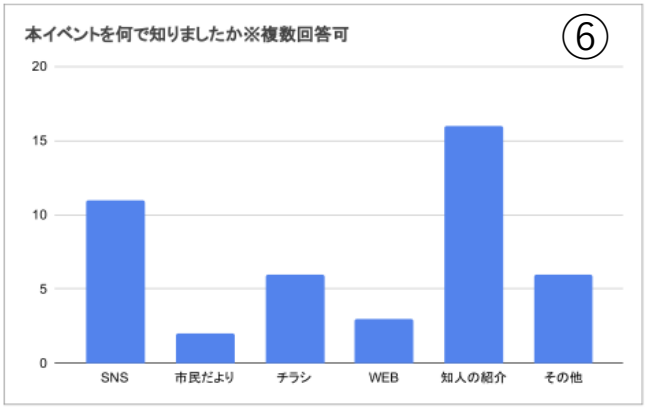


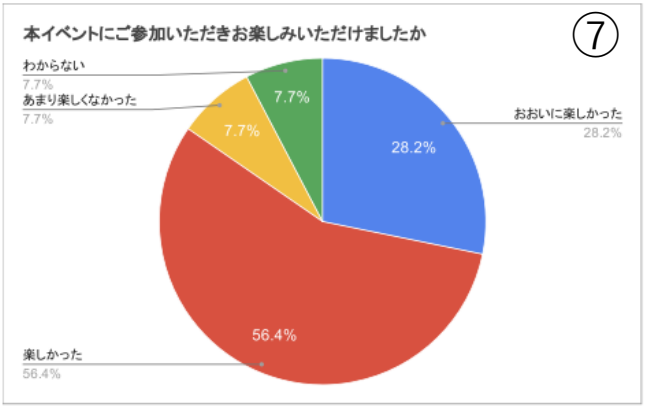












［自由筆記］

◉設問
市内外の人に伝えたい、観光名所以外の千葉市の魅力的な場所や、良い取組みがありましたらご記載ください。

①藤先生の「かえっこ」という素晴らしいご活動に、自身が取り組んでいる「ごみ拾い」を連動していただきたいと思っています。市民の皆様、一人一人が「5メートル先まで」を自分の庭と考えて、ごみ拾い、雑草取りをするだけで街の景観がよくなり、収集したものからもアート作品が生まれたら…というものです。
②１時間で都心も海にも山にも行けるポストコロナ時代に求められる利便性の高さ
③自然も都市機能も併せ持つ懐の深さ
④プロスポーツチームの多さ
⑤900年に及ぶ街の歴史
⑥都市部・住宅地に隣接して、谷津田や里山が散在すること。
⑦芸術とは言えないかもしれないが市内の古くからの部落には伝統的な行事があり、独特の作業や飾り付けなどがある。
⑧今日の話を聞いてみて、代々千葉市に住み続けている人達は阻害されている印象を受けた。ますます新住民との距離が開くのではないか。
⑨近くに千葉市ではないが、川村記念美術館もあるので、連携できたらいいと思います。
⑩千葉市美術館のつくりかけラボみたいなもの(ワークショップや作品展示など)を市内の色々な小学校の部屋を借りて定期的にやればいいと思います。(教員に迷惑をかけないようにして)
⑪「天気いいなぁ」と思ったら、その日に車に乗ってキャンプに出かけられるぐらい、キャンプ場いっぱいあります。車さえあれば海も山も近くて楽しいです。
⑫千葉市美術館の企画は現代も近代も静かに素晴らしいものが多いです。千葉市美地下の飲み屋はなぜかせんべろ風で安くて気楽で最高です。ショップも丁寧に運営されています。
⑬都内と比べて家賃が安いです。
⑭都内で暮らしていた頃はずーっとペーパードライバーだったんですが、千葉にきて車に乗れるようになりました。都内のペーパードライバーを集めて、講習かねつつ芸術祭めぐれるような謎ツアーしたら楽しそうですね！
⑮加営利貝塚、大賀ハス、千葉氏、浜辺
⑯自然を生かした(古来からの文化を含めて)暮らしの力を伝えたいです。
⑰花見川沿いの自然
⑱千葉市にはプロ野球、プロサッカーチームが存在する。地域を盛り上げるアイコンは有るが、活かしきれていない印象
⑲大賀ハス
⑳裏千葉の取り組み。「ミッケ」千葉公園、進化している。千葉都市モノレール、ギネス、ビルから出てくる構造
㉑千葉モノレール操車場。（レールの複雑さはアートだと思う）
㉒千葉市の食のブランド「千」
㉓千葉公園の再整備は期待しています。
㉔モノレール
㉕交通網が発達している。都内へのアクセスが良好。自然との共有ができている。
㉖亥鼻城から千葉駅の間に何もないので歩いていく過程で楽しめる仕組みがあると良いと思います。
㉗海や田園風景×都市の融合

◉設問
千葉国際芸術祭でプロジェクトを展開して欲しい場所がありましたらご記載ください。

・都川沿にある、浄水施設跡、また都川の環境を考える会（代表・荒田一樹さん）が、浄水施設跡地を利用して作られた淡水魚水族館。
・中央区中央通町公園
・千葉公園
・ちばみなと
・内陸部、沿岸部、蘇我、幕張、千葉中央を満遍なく。
・市内緑区のホキ美術館
・佐倉市になりますが近隣地として、川村記念美術館
・加曽利貝塚
・泉自然公園
・アートを身近に感じてもらうため、地元の商店街や飲食店でなにか企画があるといいと思います
・コラボ商品など
・今日のイベントの中で、里山というワードが出ていたが、賛成できない。里山の良いうわべだけを都合よく考えられては困る。里山を維持するのに住民がどれだけ労力をかけているか把握しているのか。人がたくさんやってきて、荒らしまくるのは耐えられない。
・千葉公園の企画がいつも都会からの買い付け的でださいので、芸術祭企画でテコ入れしてほしいです（と他力ですみません…）
・教育、福祉との繋がり
・環境に接することの出来る場所を詩美術館以外でも開催を望む。
・花見川沿いの自然
・幕張などの浜辺（都会に浜は少ない海）
・千葉都心、よし川、千葉駅前大通り
・住宅街
・多くの千葉市民の目に触れる場所。千葉駅・蘇我駅・稲毛駅・都賀駅
・遊覧船巡りなアート
・花見川での天馬船
・スタンプラリーみたいに、色々な所に行ってみたいなと思います。
・蘇我、市役所周辺、ポートパーク
・商店街
・千葉駅近く
・屋外（公園、歩道、駅など）。日々の生活の中で触れられる場。
・海ーかそり貝塚＋里山
・昭和の森、水辺の里公園、千葉そごう

◉設問
その他、千葉国際芸術祭についてご意見がございましたらご記載ください。

・現代アートという括りはオブジェや空間を広く利用したものが多いですが、ラウンドテーブルにて市美の山梨館長がおっしゃっていたように、市では画面を利用した絵画を沢山所有されています。そうしたアートの展示もしていただくことで、「画面に描く技法」も伝統として未来に繋げていただけたらと思います。
・３年ごとの花火では無く、開催の年がスタートであり通過点になれるようにプロジェクトが広がって欲しいです。
・子供達にとっては３年ごとに成長が感じられるように、地域にとっては自治会など薄まるコミュニティの繋ぎ役になるように、総じて千葉市の誇りとなる事業になって欲しいです。
・どうしても、イベントの開催地、参加者が東京湾寄りや、千葉駅周辺などの都市部の地域、住民になりがちとなりそうな気がします。人口比からいっても、ある程度は仕方ないかもしれませんが、若葉区など緑地の青い場所、住民を巻き込める企画となって欲しいです。また、参加型ワークショップですが、子供主体の参加者となる企画も良いと思いますが、アートとあまり関わりのなかった地域・世代の方々にもアプローチして欲しいです。
・少し古い話ですが、茨城県の水戸芸術館で行われたクリスチャン・ボルタンスキー展での、地域住民の古着を使った作品の企画は秀逸だったと思います。
・開催が楽しみです！
・アートはいろいろなものを揺らしてくれるので、住民としてはどんな形でもきっと楽しいなと思っています！
・自然と文化の融合した考えが子供達に伝わることを得に思います。
・書道をとりあげてほしい。
・アフターコロナの社会にあってアートの存在意義は「一時の豊かさ」では、語ることが難しくなっているのではと思っています。中村さんと藤井さんに新しい存在意義を考えていただきたいです。参加型のプロジェクトは、どうしても市民が主体になります。遠くから観にきた人も楽しめる芸術祭になることを望みます。また子どもたちだけではなく、大人や高齢者、少数派の人達も楽しめるものになる（プロジェクト）が含まれるといいですね。
・商店だけでなく自治会も加えることが出来たら、継続しやすくなるように思います。
・登壇者は”参加”の重要性を伝えていたのだが、”参加・体感・実感”の重要性は同芸術祭の重きと感じました。ただ、本日集まっているファーストオーディエンス（特に興味度が高い人々）が本日のイベントに参加出来ていないのが残念。例えばXやチャットツールなどの利用でオンタイムで参加出来たら良かった。また、興味のある人々がコミュニケーションを取る方法はないのか？今日、集まった人々が情報を広げる方法とは？主催者とのコミュニケーション方法とは？ワークショップに参加したいと思うのは、親の主導の様な気がします。まずは親達の興味を…。
・市民にとって身近な芸術祭となる事を期待しています。
・アートに参加するハードルをいかに低くするかが大切だと思いました。（今まで関わったことのない人、苦手な人をいかに取り込むか）
・別の場所に別の目的で訪れたときに、芸術に触れることができるような仕組み、仕掛けできるといい。観光に行ったら、そこにアートがあった、スポーツ観戦にいったらそこにアートがあった、アートに感心を持ってもらう、気がついてもらう取り組み、コラボ企画を期待したい。
・記憶を何らかの形にして、持って帰れたならいいなと思います。
・小学校等チラシはもらってくるが、アンテナが高くないと参加出来ない。授業参観等にワークショップを開催するなど受身でも参加できると良い。
・国際芸術祭とうたっているが英語、他の言語での発信がない印象を受けました。今後この様なイベントがあれば参加したいと思いますが「先着」ではなく「事前申告」形式にして頂けると助かります。

４．令和５年度実施の振り返り

・登壇者にはテーマに各々の立場でプレゼンしていただいたが、それぞれ独自性があり本芸術祭の本質を多角的な視点で浮き彫りにすることができた。同時に、登壇者とレスポンデントとの間でも熱の入った意見交換がなされ、市民も参加した質疑応答でも続々と発言がなされ、他の芸術系のトークイベント比較しても異例であった。

・平日水曜日の午前10時からの開始であったにも関わらず、出入りはあったものの70名を越える来場者が参加。芸術祭への期待の高さを感じさせた。

・今回、活発な議論を後押しするべく、市長、美術館館長、アーティスト、総合ディレクターという4者のプレゼンターを取り囲むように、千葉市で活動するキーパーソン7名の席を配置、その背後に一般来場者の席を設けることで、それぞれがフラットな立場で意見交換ができるよう会場の配置を計画した。これが「ラウンドテーブル」と題した所以であった。

・アンケート結果からも、本芸術祭本会期を前にしたキックオフイベントとして、手応えのある機会となった。

５．令和６年度プレ期間での展開に向けた検討

・今回の登壇者は、本芸術祭の中枢メンバーによる構成だったが、R6年度に開催する予定の「ラウンドトーク02」では町中で実施し、市内を拠点に活動する方々を登壇者として招き、「ラウンドトーク01」との差異を検証したい。

・千葉市並びに県外在住者の参加を促すため、開催日時の設定は検討していく。

・会場が千葉市美術館ということもあり美術・芸術に興味のある層が集まったように感じる。そのため、アンケート結果は、好意的な意見傾向となった可能性もある。令和6年度以降、別の会場・テーマで実施した時にどのような結果となるか継続注視したい。

・より広く芸術祭を認知してもらい、市民の芸術祭参加を促すための施策として、公式WEBが開設され次第、配信（同時もしくは事後）を検討したい。

6．記録写真

※本ラウンドトークの記録撮影：3331（合同会社コマンドA）

2. アートプロジェクト

藤浩志「かえっこ in 花見川」[会場:花見川団地商店街「花見川団地マルシェ」への出店]

1. 実施概要

花見川団地で開催される「花見川団地マルシェ」にて、アーティストの藤浩志氏が考案した「かえっこ」を実施した。
「かえっこ」とは、遊ばなくなったおもちゃを「カエルポイント」に交換する仕組みを使って、子どもたちが自発的にさまざまな活動や体験をする「遊びの場」をつくり出す仕組み。さまざまな“かえる”（変える／還る／換える・・・）活動を通して、教育、福祉、コミュニティ活動、環境などあらゆる領域の課題に対応する動きを誘発してきた。
本ワークショップは、芸術祭本会期にて主要プロジェクトの１つとなる「かえっこ」の導入のプログラムとして位置づけられる。
◉参加人数：のべ約262人

2. 開催概要

タイトル　：千葉国際芸術祭2025プレ企画「かえっこ in 花見川団地」
アーティスト：藤 浩志（アーティスト／「かえっこ」考案者）・スタッフ 5名
開催日時　：令和6年3月9日（土）10：00～15：00
会　場　　：花見川団地商店街 「花見川団地マルシェ」内 (千葉市花見川区花見川3-20-105)
参加方法　：花見川団地在住の方、近隣の方　＊参加無料
対象年齢　：未就学児～こどもの心を持ったおとな ＊未就学児は保護者同伴
持ち物　　：遊ばなくなったおもちゃ　※おもちゃを持ってこなくても参加可能

◉花見川団地マルシェ内他イベントとの連携
・イベント出展のうち、「京成ミニ電車乗車体験」「京成バス運転手体験」「消防士記念撮影」「昔遊び体験」「駄菓子屋の謎解きゲーム」と連携。
これらに参加（体験）すると、「かえっこ」において、おもちゃと交換できる「かえるポイント」をもらえる仕組み。

3. アーティスト（「かえっこ」考案者）　藤 浩志（ふじ ひろし）の紹介

1960年鹿児島生まれ。奄美大島出身の両親の影響で大島紬周辺で遊ぶ。京都市立芸術大学在学中演劇に没頭した後、地域をフィールドとした表現を模索。同大学院修了後パプアニューギニア国立芸術学校に勤務し原初的表現と文化人類学に出会う。バブル崩壊期の再開発業者・都市計画事務所勤務を経て土地と都市を学ぶ。「地域資源・適性技術・協力関係」を活用した美術表現を志向し、全国各地でプロジェクトを試みる。取り壊された家の柱素材の「101匹のヤセ犬の散歩」。一ヶ月分の給料からの「お米のカエル物語」。家庭廃材を利用した「Vinyl Plastics Connection」「Kaekko」「Polyplanet Company」「Jurassic Plastic」。架空のキーパーソンをつくる「藤島八十郎」等。NPO法人プラスアーツ副理事長。十和田市現代美術館館長を経て秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科・アーツ＆ルーツ専攻教授。NPO法人アーツセンターあきた理事長。

4. 事前準備を含む当日の動き

【事前清掃3/4実施】 会場清掃

①【開催当日】 会場に広げられた交換対象のおもちゃを整える藤氏

②続々と使わなくなったおもちゃを持って集まる参加者

③ 交換するおもちゃを探すこどもたち

④ 会場の様子

⑤ おもちゃのオークションの様子

◉かえっこのしくみ

1. 参加者は家から遊ばなくなったおもちゃを会場にもってきます。
2. 「かえっこバンク」で遊ばなくなったおもちゃを査定してもらい「カエルポイント」に替えます。
3. たまった「カエルポイント」で会場にあるおもちゃを買います。

＊「かえっこレジ」で「カエルポイント」の分だけおもちゃを買うことができます。
＊「カエルポイント」を増やしたい時やおもちゃを持ってきていない時は、会場由来の出来事や遊びに参加することで「カエルポイント」がもらえます。

◉おもちゃ査定基準

[そこそこのもの] 1 ポイント　[まあまあのもの] 2 ポイント　[なかなかのもの] 3 ポイント
＊他に[凄くいいもの=感動ポイント]も設定。感動ポイントは 4 ポイント以上付与。
＊通常は「かえるスタッフ」として参加するこどもがおもちゃを査定するが今回はスタッフが対応。

◉ かえっこ会場での取り組み

・アンケートに答えると、カエルポイント1ポイントと交換。
・かえっこ会場の中で「フラフープ体験」「けん玉体験」を行うと、かえっこスタッフによる審査を経て、相応分のカエルポイントと交換。

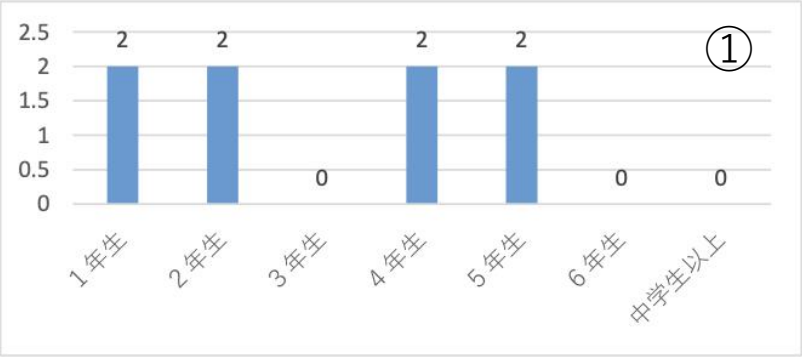
◉ オークションの実施

・15時頃よりかえっこ会場内で藤浩志氏の司会でオークションを実施。人気のあるおもちゃを、欲しい人が挙手をして自分が出せる分のポイントを声を出して発言（ビットする）し、最も多いポイントを伝えた人が欲しいおもちゃと交換するという、大人の世界のオークションと基本的ルールは同じ方式。

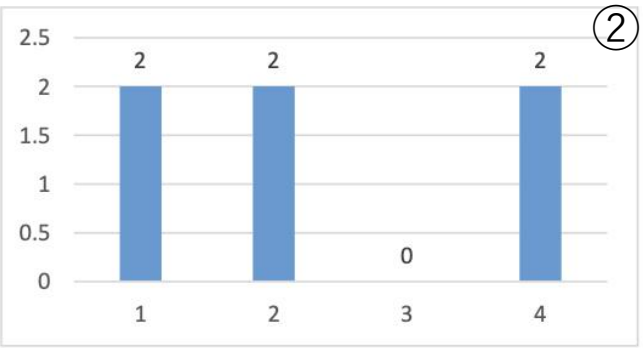
５．アンケート回答結果（こども　８件　大人５４件）

＜こどもの参加者＞

学年について

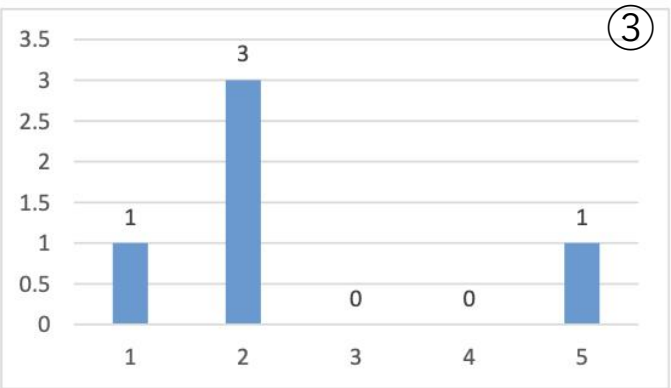


どうやってきましたか？



歩き　２
自転車　２
バス　０
車　２

どこで（だれから）きょうの「かえっこ」をしりましたか？

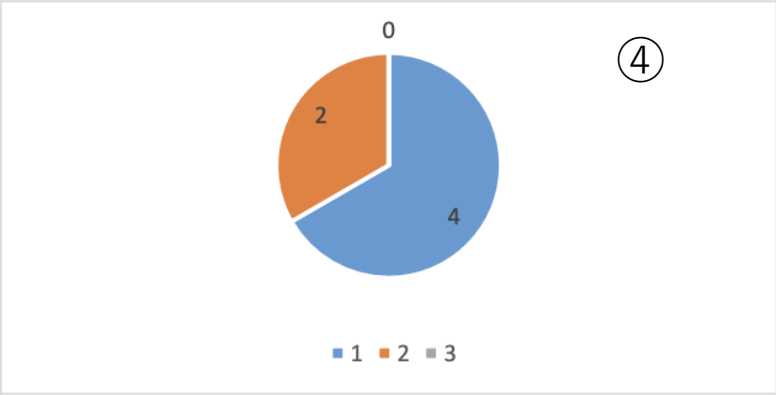


チラシ　１
今日見かけた　３
父母から聞いた　０
友達から聞いた　０
その他（友達の母から聞いた）　１

「かえっこ」にさんかしてどうでしたか？

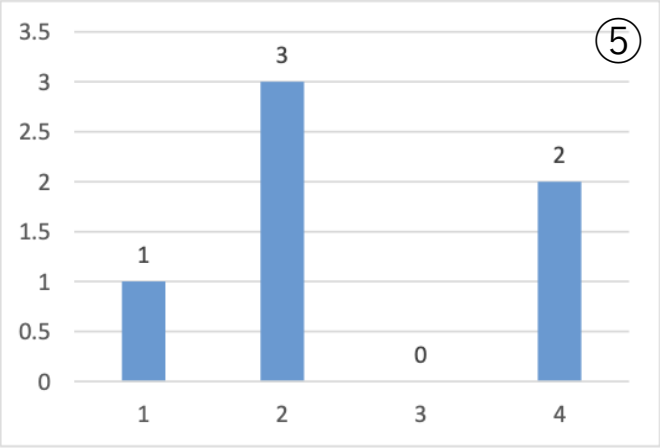
色々なものがあった、　不思議な体験だった

また「かえっこ」があったら、いきたいですか？



ここで開催されるなら行きたい　４
違う場所でも行きたい　２
行きたくない　０

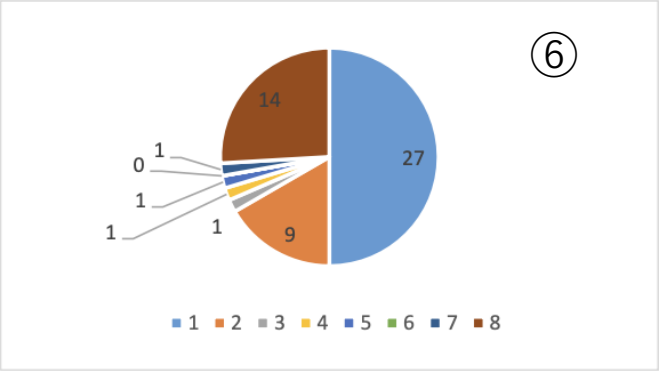
どのようなイベントにさんかしてみたいですか



絵や工作をするようなイベント　１
絵や、工作を見るイベント　３
劇などに参加するイベント　０
協力して大きな作品を作るイベント　２

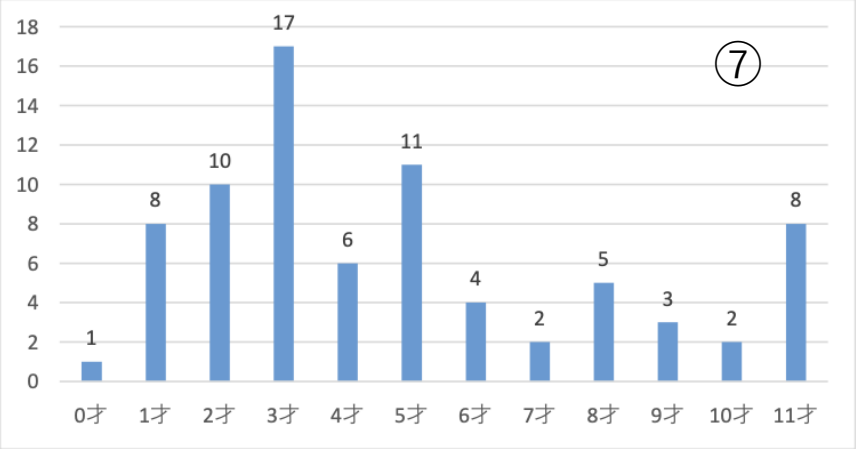
＜大人の参加者＞

【お住いはどちらですか】

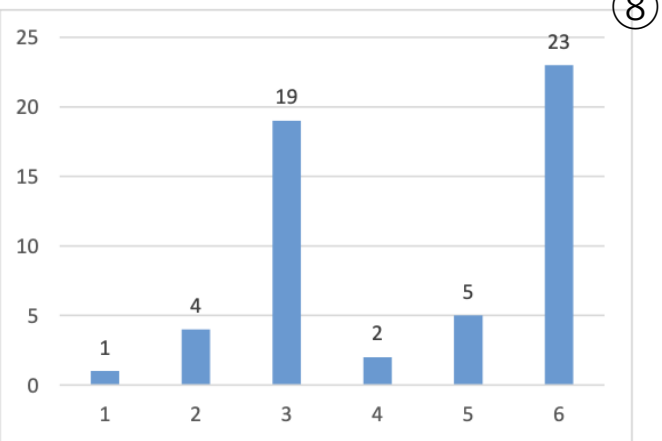


花見川区（徒歩圏内）　27
花見川区（徒歩圏外）　９
中央区　１　稲毛区　１　若葉区　１
美浜区　１
市外（八千代・習志野等）　14

【参加されたお子さんの年齢を記載してください】



【かえっこを何で知りましたか】※複数回答可

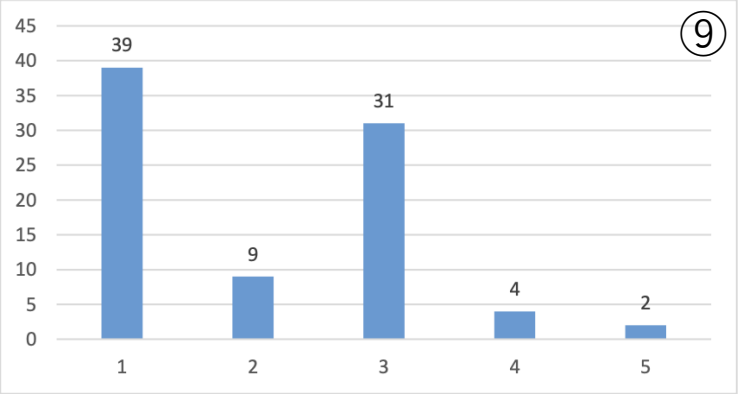


ＳＮＳ　１　市政だより　４
チラシ １９　ＷＥＢ ２
知人の紹介５
その他（地域新聞・リラックス館等）　23

【かえっこについて感想を教えてください】

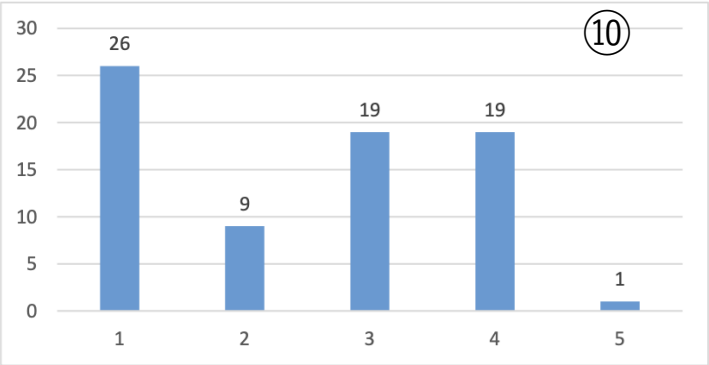
子どもが楽しそうでした・小さい子供も遊べて楽しい・こういうイベントは良い・人が集まる等

【また「かえっこ」があったらどうしますか？】※複数回答可



子どもを連れてきたい　39
友人に知らせたい　９
おもちゃを持ってきて交換してみたい　３１
子どもをお手伝いなどで参加させてみたい　４
自分（親）も運営に参加してみたい　２

【花見川団地でのかえっこの開催についてどう感じましたか】※複数回答可



花見川団地のイベントと一緒にまた開催して欲しい　２６
花見川団地の様々な取り組みを知るきっかけになった　９
子どもを連れて花見川商店街に行く理由になった　１９
花見川団地に子どもが集う、よい機会だと思う　１９
その他（普段から商店街に行く）１

【花見川団地以外で、かえっこを開催して欲しい場所がありましたら、ご記載ください。】

回答なし

【市内外の人に伝えたい、観光名所以外の千葉市の魅力的な場所や、良い取組みがありましたらご記載ください。】

回答なし

6. 令和５年度実施の振り返り

・おもちゃを持って来ないこどもたちもプログラムに参加できるように、事前に商店街に依頼した取り組み以外にも、当日の会場の様子や来場者層を見ながら遊びの要素を加えたポイント授与のイベントを設け、臨機応変に花見川団地に適した「場」をつくっていった。

・今回、UR様、花見川団地商店街振興組合様、所轄課など、様々な関係部門の連携によって実現に至った。短い期間での企画設計で困難も多かったが、花見川団地で行う初の取り組みとして、手応えのある実施となった。

・来訪者の滞在時間が長く、何度も会場に訪れる姿が見られた。ルールがわかりやすいため、来場者が気軽に会場内に入っていく姿が印象的であった。

・オークションについては、花見川団地で実施する初の「かえっこ」であったため、企画当初は実施が確定していなかったが、花見川の来場者の雰囲気が大変良かったために、オークショナーを藤浩志氏に依頼し、藤氏が自らオークションを取り仕切った。1日のみの開催という限られた時間の中で多くのポイントを貯めた子どもたちが、大きな声を出してオークションに参加している姿は微笑ましく印象的であった。

・開催前に商店会の方（大人）に本プログラムの説明に伺った際、子どもたちがルールを理解できるかどうかを心配されていたが、今回の実施内容を受け、その懸念は難なくクリア出来ていたと振り返りの発言されていた。実際に参加しなくとも、外から「かえっこ」の様子を見るだけで、子どもも大人も理解でき楽しめる本プラグラムのシンプルさが、「かえっこ」が各地で導入されている理由でもある。

７．令和６年度プレ期間での展開に向けた検討

・「かえっこ」の実施や、ワークショップ参加者を募集する企画において、開催する場所に適した企画内容にすることが重要であるため、場所との関わりを持っている人やこれから「かえっこ」を現地で推進していく人が参加することが望ましい。現在はまだ未開拓であるため、花見川団地を中心としたかえっこコミュニティが醸成されていくことを目指したい。

・これまでのコマンドAにおける「かえっこ」の実績では、同一会場、もしくは近隣で連続開催することで、より多くの集客を見込める結果が出ているため、今度、市内で連続開催を実現するため、「場所」の設定と、その場所にゆかりのある現地スタッフ等の「人」の確保が大事になると考える。

・「場所」は開催する場所はもちろんのこと、運搬にコストや時間をかけないために、交換前後のおもちゃや独自の資材を保管するための倉庫活用できる空間も必要である。

・花見川団地マルシェが広いエリアであったので、ポイント交換が行える連携イベントの場所へ、人を誘導することが難しかった。今後は、全体の見取り図等を使って案内していきたい。

9. 記録写真

※かえっこの記録撮影：3331（合同会社コマンドA）

３．アートプロジェクト

西尾美也ワークショップ「くふぅく」[会場:千葉市美術館ワークショップルーム]

1. 実施概要

千葉市美術館5階 ワークショップルームにて、美術家でありファッションデザイナーの西尾 美也（にしお よしなり）氏による、ワークショップを実施した。
「工夫して着る服」という意味を持った「くふぅく」は、 「3本足の長ズボン」や「そでが長すぎるシャツ」など西尾氏が考案したおもちゃのような服のこと。本ワークショップでは、このような普通ではない服を試着した後に、参加者が自分だけの「くふぅく」を制作した。
本ワークショップは、芸術祭本会期にて主要プロジェクトの１つを担当する予定の西尾氏による、
芸術祭への導入のプログラムとして位置づけられる。

◉参加人数：14名（定員15名）

2. 開催概要

タイトル　：千葉国際芸術祭2025プレ企画 西尾美也ワークショップ「くふぅく」
講　師　　：西尾 美也（美術家、ファッションデザイナー）・スタッフ 4名

開催日時　：令和6年3月16日（土）14：00～16：30
会　場　　：千葉市美術館 5階 ワークショップルーム(千葉市中央区中央3-10-8)
参加方法　：申込制　＊「ちば電子申請サービス」にて
申込期間　：令和6年2月21日（水）～3月12日（火）＊応募多数の場合は抽選
定　員　　：15名
参加料　　：無料
持ち物　　：加工しても良い不要な服2～3点

3. アーティスト紹介

Photo by Natsumi Kinugasa

西尾 美也（にしお よしなり）

1982年奈良県生まれ。美術家・ファッションデザイナー。東京藝術大学美術学部先端芸術表現科准教授。装いの行為とコミュニケーションの関係性に着目したプロジェクトを国内外で展開。ファッションブランド「NISHINARI YOSHIO」を手がける。

4. 当日の進行と様子

① 円形で座り参加者の自己紹介と持参した使わなくなった服の説明

② 講師よりワークショップの内容説明

③ 講師の過去の作品や、過去に別の場所で実施された「くふぅく」で作られた服を、参加者が触れてみたり、着用してみたりする

④ 今回のワークショップで主要な素材となる、人が頭を出せる程の穴が複数空いている大きな黄色い布を参加者が協力して広げる。この布も、頭を通せば「服」となるということを参加者が共有

⑤しばらく布を浮かせたり子供たちが中で遊んだりする時間をとり、その後黄色い布を参加者それぞれが切り分けて、自分が制作する服の素材の一部にしてもらう

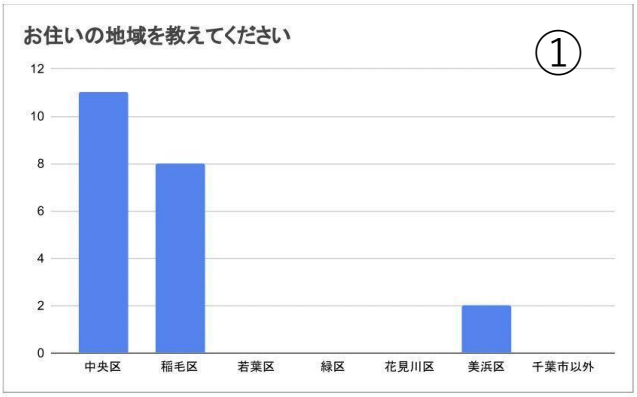
⑥各自机と椅子があるスペースに移動。切り分けた布と、それぞれが持ち込んだ服同士を縫ったりくっつけたりして、「くふぅく（工夫した服）」を制作する

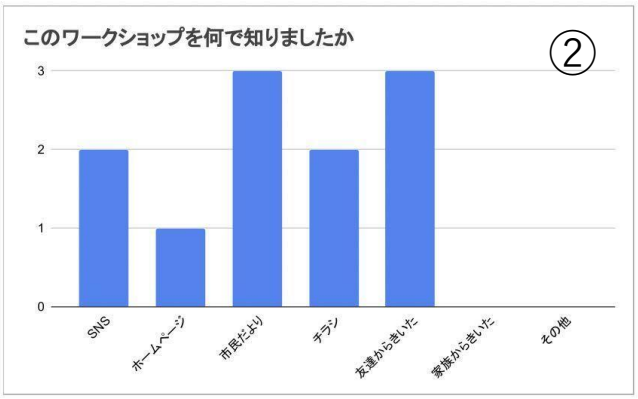
⑦ 完成した服を着用して、参加者それぞれお披露目と写真撮影を行う

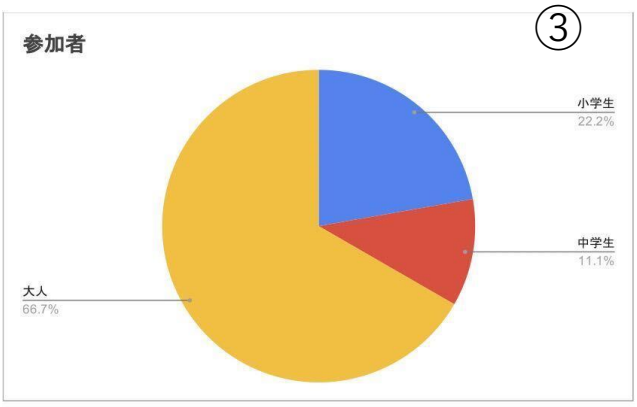
⑧ 講師の西尾氏、芸術祭総合ディレクターの中村氏よりまとめのご挨拶。終了

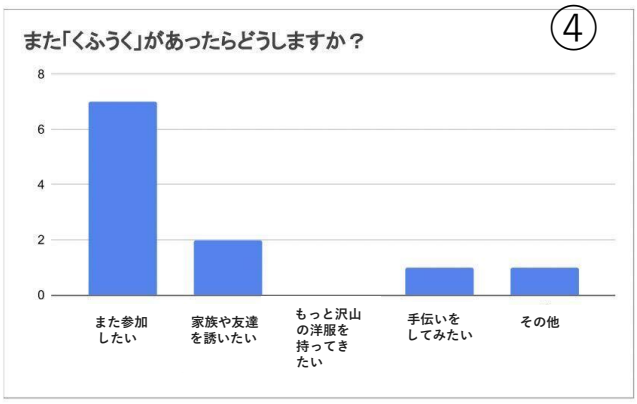
※撮影：ゆかい（ただ）

5. アンケート回答結果　＊取得数 9（参加者14名のうち）









◉設問
「くふうく」についてかんそうを教えてください　※文章は原文のママ

①**たのしかった**
②友達が仕上げた作品から、新しいヒントを得たようで、家でもやってみたい!!と言っていましたか。今までになに新鮮な発想がとても楽しそうでした。本日はありがとうございました。
③たくさんの人のアイディアなどをともに自分ならではのくふうくを作ることができてすごく楽しかったです。
④時間を多めにとって、ゆっくり、おち着いて作れるようにしてほしいけど、服をこんなふうに、キレイにできて、すごく楽しかったので、また来たいです。
⑤もっと時間が欲しかったです。
⑥集中して楽しめました。

◉設問
今日の場所ではない所で「くふうく」をかいさいしてほしい場所がありますか
※文章は原文のママ

・さいわいちょうこんみんかん
・生涯学習センター

6. 令和５年度実施の振り返り

・子どもも大人も同じ場で同じプログラムを実施することで、年齢の垣根も取り払われ、互いの創作に刺激を受け合う姿が印象的であった。本ワークショップの参加者層をこどもから大人まで参加できるよう設定した目的のひとつを実現できた。

・広報期間が潤沢でなく参加者の取得に苦慮したが、結果としては定員15名に迫る人数がワークショップに加わる形となった。

・千葉市美術館の広いワークショップルームを贅沢に利用し、大きな布を広げる冒頭のパートでは日常生活とは異なる「1枚の布」の使い方に相対する参加者の笑顔が印象的だった。

・プログラムを実施した印象では、参加した子どもたちは巨大な「1枚の布」への順応が早く「布」への接し方が比較的自由で、スタッフによるアドバイスをうまく吸収して創作を楽しんでいた。大人の参加者はスタッフからのアドバイスや対話が多ければ多い程満足感が高まる印象があった。

・アンケート結果でも「また参加したい」と答えた人数が7名と満足度の高いプログラムであったことが伺える

７．令和６年度プレ期間での展開に向けた検討

・アンケートで「もっと時間が欲しかった」という回答もあった。こどもも参加するワークショップのために、今回設定した2時間30分という時間はこどもが集中できる時間として最長の長さであったが、作り足りない参加者には、自宅に持ち帰って実施できるような仕組みも検討していきたい。

・配布したチラシは、千葉市美術館で2日連続で行われた西尾氏と栗原氏のワークショップ内容を表と裏それぞれに掲載したが、スペースの関係で細かな内容までは掲載できていない。今後は、ワークショップ内容が伝わりやすいチラシ文面とデザインが必要と思われる。

・今回のワークショップでは広い空間で集中して作業を行うパートもあり、会場内が静まりかえる時間帯もあった。「布」をテーマにした内容であったため、楽しく軽やかな雰囲気を演出する事も必要なため、急遽BGMを流すこととなった。プログラムを実施する際には、「場」の雰囲気を逐次読み、スタッフが対応することが肝要と改めて感じることとなった。

8. 記録写真

※撮影：ゆかい（ただ）

4. スクーリング

栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」
（会場:千草台アフタースクール）／作品発表会（会場:千葉市役所1階 情報ステーション）

1. 実施概要

本芸術祭キックオフイベントの一貫で、2024年2月28日（水）10時から実施したラウンドテーブルイベントの後、午後1時より千草台小学校アフタースクールにて、アフタースクール利用児童を対象に実施した。

本ワークショップは、子どもたちが自分だけの千葉市の魅力＝地域因子を発掘し、栗原氏が事前に用意した様々なパーツと共に、オリジナルの図案をスキャンしてカットする事のできるカッティングマシーン等を用いて部材を制作。大人の建築家が建築模型を制作する時に使用する実際の材料や接着材を使って自分だけの建築模型を制作した。

模型の制作から千葉市役所1階情報ステーションで展示するまでをひとつの流れとし、プログラム終了後に既に展示が始まっている千草台小学校での制作分に追加する形で千葉市役所で展示を行った。

本ワークショップは、芸術祭本会期にて主要プロジェクトの１つを担当する予定の栗原氏による、本会期での発表に向けた導入プログラムとして位置づけている。

参加人数16人

2. 開催概要

タイトル　：千葉国際芸術祭 2025プレ企画
　　栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」
講　師　　：栗原良彰（アーティスト）・スタッフ 3名
開催日時　：令和6年2月28日（水）15時30分 ～ 16時45分
会　場　　：千草台小学校アフタースクール（千葉市稲毛区天台5丁目11-1）
参加方法　：アフタースクール運営会社による児童への呼びかけ
定　員　　：15名
参加料　　：無料

【市役所での成果発表展示】
タイトル　：千葉国際芸術祭 2025プレ企画
　　「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」みんなの作品発表会！
日　時　　：2024年3月13日（水）～ 3月21日（木）8時30分～17時30分
休場日　　：土日祝　※3月16日（土）、17日（日）、20日（水・祝）入場料：無料
会　場　　：千葉市役所 1階 情報ステーション

3. アーティスト紹介

栗原 良彰（くりばら よしあき）

1980年 群馬県生まれ。アーティスト。東京藝術大学特任准教授。法政大学兼任講師。アーティストは、自由の体現者であるべきだという考えを持ち、従来のアートの制度に捕らわれることなく、アートが社会に対してアクチュアルに機能することを目的に活動している。特定の表現スタイルにこだわらず、彫刻や絵画、インスタレーション、ビデオ、 パフォーマンス、映画、ワークショップなど、あらゆる表現方法で制作活動を行なっている。

4. 当日の進行

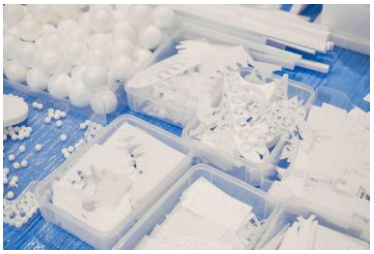
① [導入]テーマパークってなんだろう？講師によるワークショップの説明と道具の説明
※講師の愛称は「Dr. 栗原」。参加した子どもたちが講師に話しかけやすいように「ドクター」と名乗る

①

②

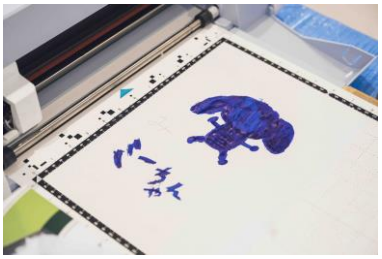
② アーティストが事前に作ってきた発泡スチロール製の部材を選ぶ

③



④

③ オリジナル図案の下絵制作と、スタッフによるカッティングマシーンでのパーツづくり



⑤

⑥

④ 模型制作

⑦

⑧

⑥ 吹き出しを象ったパーツに、模型の説明やテーマパークの名称を書いて、模型につける

⑨

⑩

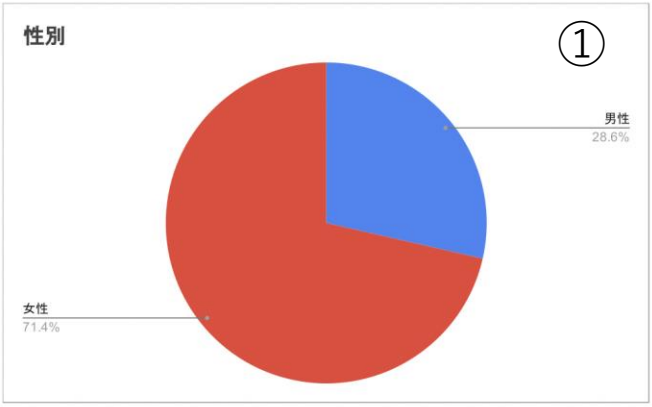
⑦ 完成した模型のお披露目と参加者同士の鑑賞会

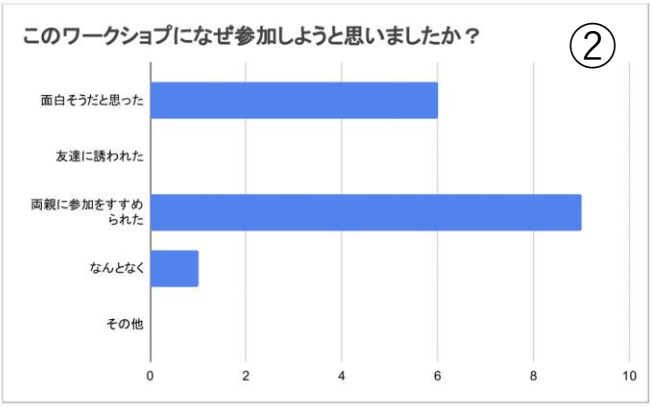
⑧ 講師の栗原氏からまとめの挨拶と記念撮影。終了

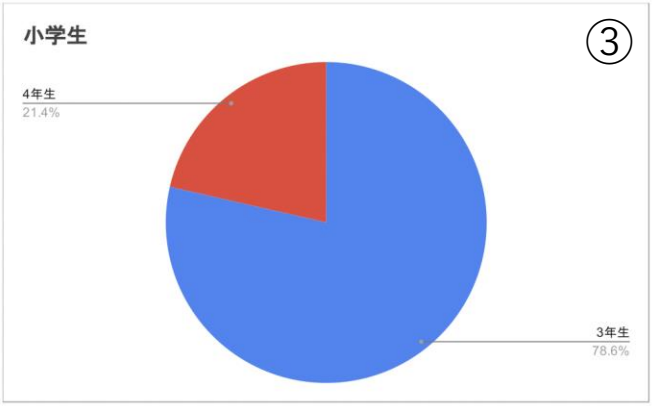
⑪

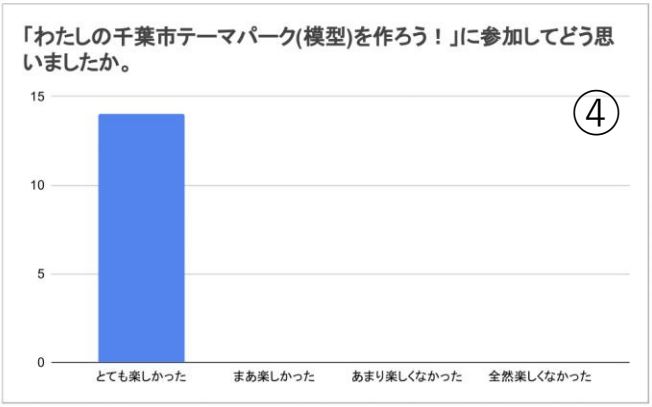
※①②③⑥⑪撮影：3331（合同会社コマンドA）　※④⑤⑦⑧⑨⑩撮影：ゆかい（ただ）

5．アンケート回答結果　＊取得数 14 （全て児童による回答）

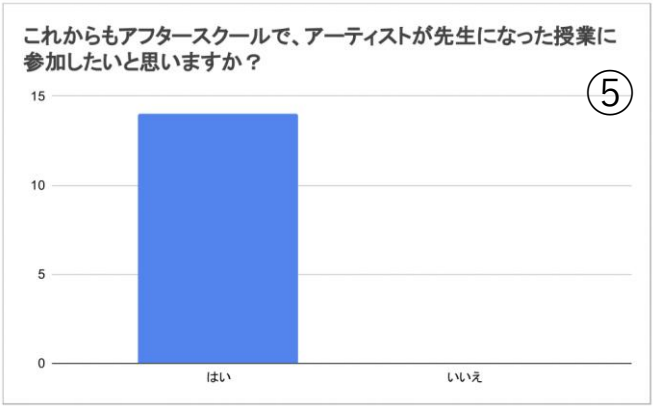








◉設問
授業の中で、初めて知ったことやおもしろいと思ったこと、思い出に残ったことを教えてください。※文章は原文のママ



・千葉市のいいところをたくさんつくった。
・ハッポウシチロールをとけるてしらなくてびくりした。
・千葉のいいとこをたくさん作れたこと
・アリオがうまく作れてうれしかった。
・もけいを作るのがはじめてだっだからどんなふうに作るのかをしった
・きるのがたのしかった
・でんしゃのせんろを作るのがむずかしくて、思い出にのこった
・さいしょは、何を作ろうかまよったけど、だんだんアイデアをおもいついて、それをじつげんしようとがんばったら、こうなりました。
・ハッポウスチロールがとけるなんてしらなかったからおもいでにのこった
・ドクターのどうぞうをみるだけでとても楽しい
・工作はおもしろい
・おもしろいさくひんができた。
・メリーゴーランドを作ろうとしたけど反対にしたら、思しろそうと思ったからしたら、ロッテになった。（ZOZO）
・発泡スチロールで、もけいを作れるなんておもしろいなと思いました。

６．令和５年度実施の振り返り

・今後、本芸術祭の柱のひとつである「芸術教育」を実施する場として、千葉市全区に広がるアフタースクールでの開催に大きな期待が持てる機会であった。

・本芸術祭の取り組みの中で、初めて千葉市内で行ったワークショッププログラムであり、特にコミュニケーションの部分では手探りな部分も多かったが、非常に手応えのある実施となった。

・稲毛区天台にある千草台小学校を利用したアフタースクールで実施した。千葉市の地域資源を発掘し、市民参加型のアートプロジェクトを主眼に置いた本芸術祭の主旨を受け、それに呼応するように講師の栗原氏が本プログラムの設計を行った。まさに本芸術祭の在り方を象徴するワークショッププログラムである。

・今回の千草台小学校アフタースクールでの実施が実現したのも、文化振興課とアフタースクールを所管している生涯学習振興課との連携があった事、更にはアフタースクール運営会社からのバックアップと受け入れ体制が整っていたことが大きな要因であったと思われる。

・アンケート結果を見ると「とても楽しかった」と答えた児童が全数であった。このポジティブな結果は3月17日に千葉市美術館で同プログラムを実施した時にも見られる傾向だが、講師である栗原氏の人柄、コミュニケーション力、こどもの創造性を引き出す力によるものが大きい。

・また栗原氏は事前準備やプログラム設計も入念に行っている。予め千葉市を象徴する場所の図像を象ったパーツを用意して参加者の創造力を刺激する導入をつくり、制作過程で創造力が膨らんだこどもたちが自由にパーツを作れるようにと自分で描いた図案をスキャンしてその場でパーツを作れるようなカッティングマシーンも導入。これは新しい技術を用いて、こどものイメージを具現化する道具として非常に役立った。

７．令和６年度プレ期間での展開に向けた検討

・本ワークショップでは、手をかければかけるほど創作物が充実していくような性質を持っている。それを見越して、今回時間内に仕上がらなかったこどもが、次回アフタースクールを利用する時に継続して制作を続けられるような設計にしていた。令和6年度以降の企画制作の中でも制作時間の面では継続検討していきたい。

・3月17日に市美術館で行った同プログラムのアンケート内意見でも同様だが「もっと時間が欲しい」という意見が多くみられた。これは物理的に時間が足りなかったということと同時に、それだけ参加者が制作に熱中し、創造力が喚起されて作りたいもののイメージが広がってきた現象を示している言葉とも捉えられる。

・今後、芸術祭本会期に向けて、栗原氏による同じテーマのワークショップを複数回実施する予定であり、そこで制作された作品を集めて再展示することを計画している。こどもたちが作った制作物がどのように栗原氏のアートプロジェクトとリンクしていくか、本会期に向けて期待が高まる。

7．ワークショップ記録写真

５．アートプロジェクト

※４ と重複する箇所が多い為、一部詳細は割愛

栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」

（会場:千葉市美術館ワークショップルーム）／作品発表会（会場:千葉市役所1階 情報ステーション）

1．実施概要

千葉市美術館5階 ワークショップルームにて、アーティストの栗原 良彰（くりばら よしあき）氏による、小学校1年生から中学3年生を対象にしたワークショップを実施した。
※本ワークショップは、2024年2月28日に千草台小学校アフタースクールにて実施したプログラムと同内容となり（P.２１参照のこと）、

模型の制作から千葉市役所1階情報ステーションで展示するまでをひとつの流れとし、プログラム終了後に既に展示が始まっている千草台小学校での制作分に追加する形で千葉市役所で展示を行った。
本ワークショップは、芸術祭本会期にて主要プロジェクトの１つを担当する予定の栗原氏による、本会期での発表に向けた導入プログラムとして位置づけている。

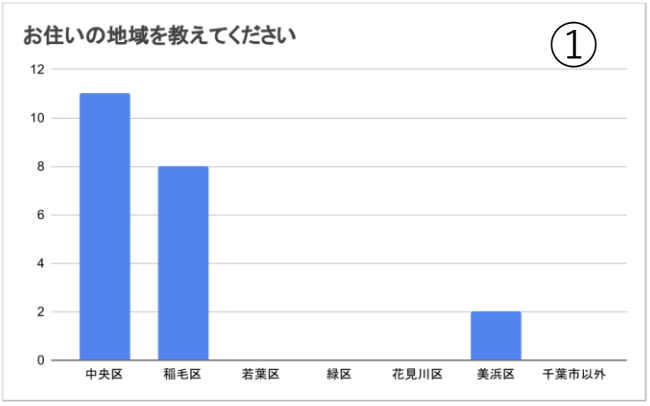
◉参加人数：13名（定員15名）

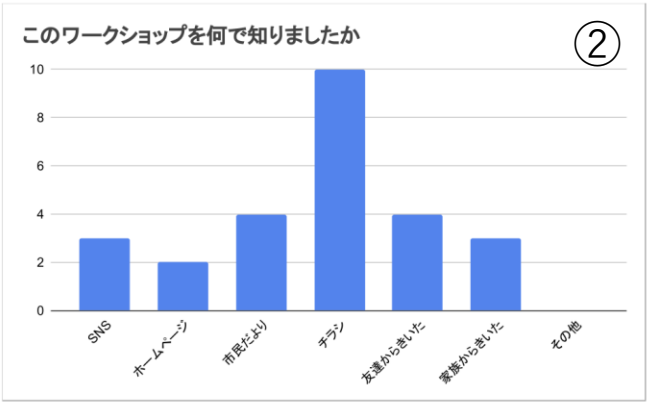
2．開催概要

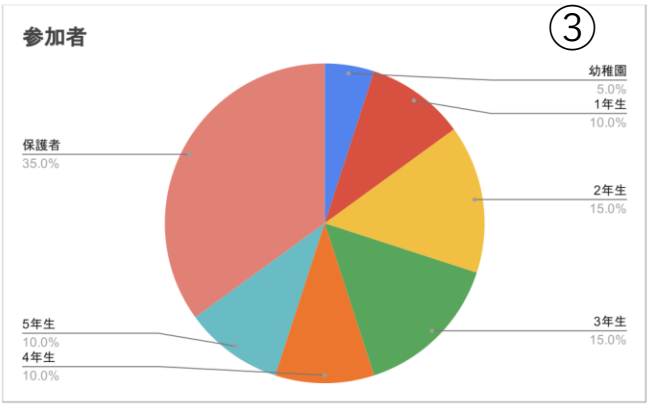
タイトル　：千葉国際芸術祭 2025プレ企画
　　栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」
講　師　　：栗原 良彰（アーティスト）・スタッフ 3名
開催日時　：令和6年3月17日（日）13：00～15：30
会　場　　：千葉市美術館 5階 ワークショップルーム(千葉市中央区中央3-10-8)
参加方法　：申込制　＊「ちば電子申請サービス」にて
申込期間　：令和6年2月21日（水）～ 3月5日（火）　＊応募多数の場合は抽選
定　員　　：15名
参加料　　：無料

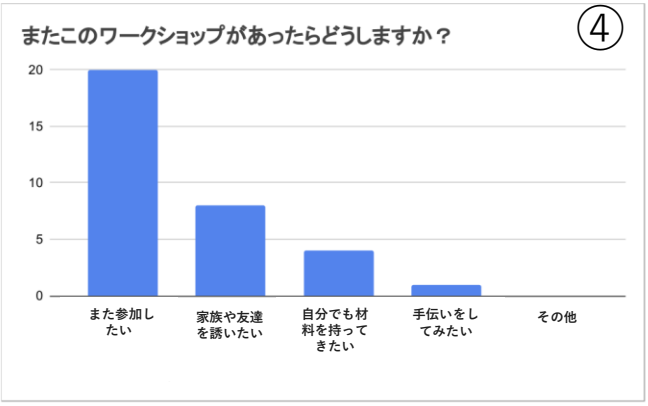
【市役所での成果発表展示】
タイトル　：千葉国際芸術祭 2025プレ企画
　　「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」みんなの作品発表会！
日　時　　：2024年3月13日（水）～ 3月21日（木）8時30分～17時30分
休場日　　：土日祝　※3月16日（土）、17日（日）、20日（水・祝）入場料：無料
会　場　　：千葉市役所 1階 情報ステーション

3．アンケート回答結果　＊取得数 21 （こども：13 ／保護者：8）









◉設問
今日の場所以外で、このワークショップをかいさいしてほしい場所がありますか　※文章は原文のママ

＜参加者＞
・中央区の近くだったらどこでもよい
・どこでもやりたいです
・小学校の体いくかん
・千葉中央区の図書館
・子供向けのワークショップをたくさん開催してほしい
・小学校や中学校の図工のじゅぎょうでかいさいしたら、うれしいと思います。
・キボール
・がっこう
・小中台南小学校（2件）
・そがコミュニティセンター

＜保護者＞
・千葉駅周辺ならどこでも
・支援センターで小さい子向けのワークショップがあると行きやすいです。
・生涯学習センター　（2件）
・学校、公民館などのところでかいさいできると幸いです。
・稲毛図書館、中央図書館

◉設問
今日の感想を教えてください　※文章は原文のママ

＜参加者＞
①もっと時間があるともっといいものがつくれる気がしました。
②じょうずにできました。たのしかった。ありがとうございました。
③はっぽうすちろうるをきったりはったりしてかたちをつくれたからたのしかった。
④いろいろくっつけたりして楽しかった。
⑤先生たちが親切でよかった。
⑥みんなで一つの作品を作ったら楽しそうと思います。
⑦もっと時間が欲しい
⑧いいのができてよかった
⑨つくるのがたのしかった！でもやってみたい電熱線？の道具がつかえてうれしかった
⑩工作ができて楽しかったから、またしたいです
⑪楽しかった
⑫もういっかいやりたい
⑬たのしかった。

＜保護者＞
・子供たちが創造力を働かせて、夢中にやっている姿が嬉しかったです。あっという間の時間でもっとやりたかったです。とても楽しい時間をどうもありがとうございました!!
・もっともっとやりたかった！おうちでもやりたい。ドクターさんがお家に来て一緒に作れたらいいなあ、と思いました。
・親だけでは力不足でできない、アドバイスやアイディアがいっぱいでとても楽しくいい刺激になりました。ありがとうございました。
・ドラマなどで模型づくりの様子を見たことがありました。実際にどんな風にやっているのかを知ることができてとても興味深く楽しかったです。参加してよかったです。
・子供が自由に作ることができて良かった。
・子供が集中できて、まわりのスタッフのてつだいで完成できて、よかったです。
・大きなパーツで大きなものを作るのも楽しそうだなと思いました。テーマを自分で決めても楽しいかも？と思いました。
・工作を通して学べてました。ありがとうございました。

４．令和５年度実施の振り返り

・また、申込制のワークショップであったためか、こども達も積極的に創造力を膨らませ、難易度の高い工作に挑戦していたことが印象的だった。それぞれの視点が反映され、千葉市を象徴する数々のコンテンツが散りばめられたテーマパークづくりは、作者であるこどもたちの郷土愛を育み、未来へのイメージを膨らませる経験になったと思われる。講師の栗原氏が意図した狙いが見事に結実したプログラムとなった。

・参加者を広く募り、対象年齢の下限も小学校1年生に引き下げ、保護者同伴であれば参加できるように設計した。そのため親子や参加者のご兄弟など家族連れで参加するケースも多く見られ、和やかな雰囲気でプログラムが進んだ。こどもたちの創作を見守る親御さんたちの姿は大変印象的だった。

・プログラムは、参加者の年齢に関係なく、各々がイメージを膨らませて作品制作に挑んでいた。材質が軽く加工もしやすかったことと、講師が事前に工作に必要なパーツを準備していったことも功を奏し、低年齢のこどもも自信を持って作業を進めていた。

５．令和６年度プレ期間での展開に向けた検討

・アフタースクールでも市美術館でのワークショップも、制作時間が足りないと考える参加者も多かったように思える。

・本芸術祭では同内容のワークショップを継続して行う計画であるため、今後は制作時間を長くとる回も設計し、比較検証してみたい。

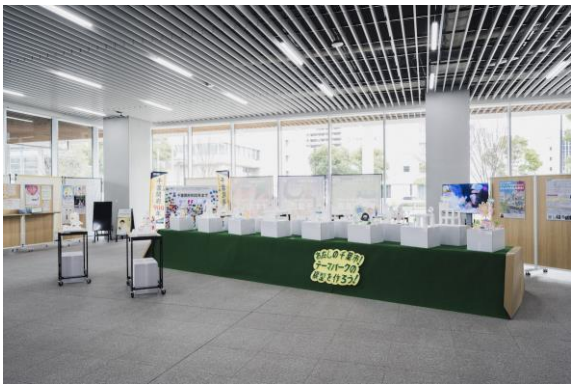
・アンケート内の意見として「もっと時間が欲しい」という意見が多くみられた。実際に、本ワークショップの企画段階では、午前午後に時間を分けて長い制作時間をとることも検討していたが、コンパクトにプログラムを計画するために、トライアルも兼ねて2時間30分という時間設定を行った。

・同時に、こどもたちが継続的に制作することができるように、思い立った時に作りに行けるアトリエのような空間と、作りかけの作品を置いておける空間を兼ね備えた場所があることが理想だと考える。

6．ワークショップ記録写真

※撮影：ゆかい（ただ）

7．「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」みんなの作品発表会！　記録写真ほか



[上]市役所1階の情報ステーションの空間を大胆に利用し、千葉市の里山をイメージした展示台を出現させた。展示台の主な材料はは市役所から借りた長机と緑色のパンチカーペットで両端をダンボールで塞ぎ美観を保つ工夫を行った。

[上] 2月28日制作分を先に展示。3月17日制作分は、市役所備品の可動式机を利用し、即席の展示台を増やす形で対応した。

[上] 2月28日に千草台小学校アフタースクールで行ったワークショップの様子を撮影してショートムービーを制作。展示物の補足説明と、参加者と展示物のリアリティを表現するため展示会場で投影した。

千葉国際芸術祭 2025プレ企画
「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」みんなの作品発表会！

日　時：2024年3月13日（水）～ 3月21日（木）8時30分～17時30分
休場日：土日祝 ※3月16日（土）17日（日）20日（水・祝）入場料：無料
会　場：千葉市役所 1階 情報ステーション

＜展示作品について＞
・2024年2月28日（水）千草台小学校アフタースクールで制作された作品
・2024年3月17日（日）千葉市美術館 5F ワークショップルームで制作された作品
　※3月17日（日）夜間に展示。18日（月）から公開

＜展示概要文（展示会場に掲示）＞
「ひらく　街とこころ」をテーマに開催する「千葉国際芸術祭2025」のプレ企画として、アーティストの栗原良彰（くりばら よしあき）さんによるワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」が、市内各所で行われています。
このワークショップは小学生以上を対象として行われ、参加者が自分でみつけた千葉市の魅力やおもしろい場所などのアイデアを持ち寄り、自分だけの「千葉市をテーマにしたテーマーパーク模型」をつくるというもの。このたび、ワークショップで子どもたちが制作した作品を一挙公開いたします。
このワークショップで使用されている材料は、大人たちが建築模型を作るのと同じ材料を使うという本格仕様。子どもたち自らが建築家になったつもりで、自分が暮らす街「千葉市」のイメージを膨らませていきました。
制作方法は、講師が事前に準備した千葉市のランドマークをかたどったパーツを使いながら、子どもたちがオリジナルで描いたモチーフをカッティングマシーンで切り取って新しいパーツを作ったり、自分でカットしたパーツの数々を自由に組み合わせながら、立体的に仕上げていきます。
これからの千葉市を担う子どもたちが作った、この世にひとつしかない独創的な力作の数々をぜひご覧ください。

６．アートプロジェクト

Slow Art Collective Chiba ［会場:京成千葉駅センシティ南北通路］

1. 実施概要

千葉センシティ南北通路（そごう千葉店1階入口前）にて、オーストラリア・メルボルン在住の加藤チャコとディラン・マートレルが主宰する芸術グループ「Slow Art Collective」による市民参加型のアートプロジェクトを実施した。

本ワークショップは、芸術祭本会期にて主要プロジェクトの１つを担う「Slow Art Collective」による芸術祭への導入プログラムとして実施するとともに、千葉市の玄関口であるセンシティを会場とすることで、市民参加型で街の中を会場とし、企業連携も大切にする本芸術祭の在り方を象徴する出来事とし実施するものであった。

◉参加人数：2,937 人（14日間／1日平均209名）　※R6.4.1～R6.4.7は令和６年度事業として実施

2. 開催概要

タイトル　：千葉国際芸術祭2025プレ企画 「 Slow Art Collective Chiba 」
アーティスト：Slow Art Collective ・スタッフ 14名（監視ほか）
開催日時　：令和6年3月27日（水）～4月7日（日） 10：00～19：00
会　場　　：京成千葉駅センシティ南北通路（そごう千葉店1階入口前）（千葉市中央区新町1000番地）
参加方法　：同スペースを通行・利用される千葉市民の方々。ワーカーの方々　※参加無料
対象年齢　：こどもから高齢者まで。年齢制限なし
協　力　　：株式会社千葉センシティ、株式会社そごう・西武 そごう千葉店

◉株式会社千葉センシティ様のご協力：場所の提供、使用にあたっての様々なアドバイス
株式会社そごう・西武そごう千葉店様のご協力：広報のご協力（社内の全従業員に情報提供するとともに、店舗のウェブサイトにも情報を掲載。更には近隣の保育園・幼稚園にも手配りでチラシを配布）

3. アーティスト紹介

センシティ会場にて撮影

スローアートコレクティブ　Slow Art Collective

オーストラリアのメルボルン在住の加藤チャコとディラン・マートレルが主宰するアートコレクティブ。
2009年より、環境に負荷の少ない身近な素材を駆使して、観客とともに完成させていくアートを展開している。コミュニティ、環境、自然、街、素材とのコラボレーションを大切にして、それがゆっくりと社会の中に浸透し成長していくようなアート活動のあり方を模索している。タラワラ美術館、ヌーサ美術館、マッククレランド野外彫刻美術館、モーニントン半島美術館、シドニーパワーハウスミュージアム、Mパビリオン、ビクトリア国立美術館、ガートルード・コンテンポラリー、シンガポールのエスプラネード・シアターズ・オン・ザ・ベイ、その他地域の学校、アートフェスティバル、ショッピングセンターなど多岐にわたる場所で制作活動を展開している。

４．プロジェクトの流れ

① [搬入]アーティストと施工会社による竹を用いた構造物の事前設置
② [搬入]アーティストとスタッフによる事前装飾（紐、鉄筋等）
③ [会期中]仕上がった竹製の構造物に設置された編み元に市民の手によって自由に紐を編み込んでく
④ [会期中]会期終了まで市民による紐を編む行為が続き、アートワークがどんどんと成長していく

■構成物１　星型構造体（床置き）

・竹で組んだ星形のユニットをつなぎ合わせて、自立型の構造体を作る。

・1ユニットは6本の竹で組んだ構造体。床に対して3点で自立する。（【図1】参照のこと）

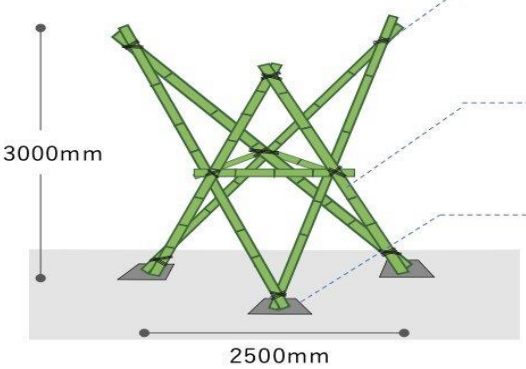
・竹の結合方法は、番線や結束バンド、ロープ等を複合的に使用して固定する。

・本提案では、このユニットを３つづつ繋げて構造体を作る。ユニットが複数結合することによって床への設置点が増え、構造体が安定化する。（【図2】参照）
それぞれの構造体の上部に更に竹を渡し、人が通れるような通路を作り導線を増やす。

・床面や既存の構造物への接点には、美観と安全性を担保した上で、部分的にタイルカーペット等での養生を行う。

・ユニット同士を結合する際には、上部、中央部等に、補強のため横に竹を通し強度を高める

【図1】



接合部は竹用ビスで固定し、さらに番線で固定

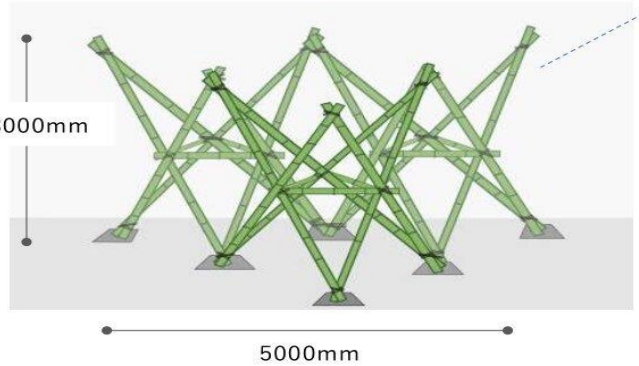
ビスと番線で固定し、紐などで装飾を行う

青竹：Φ70～80mm、長さ4m、約8kg/本
構造1ユニット：4mの竹を約7本使用＝重量約56kg

設置面はタイルカーペット等で保護。必要に応じて、設置面積を増やし重量の分散を行う。

タイルカーペット

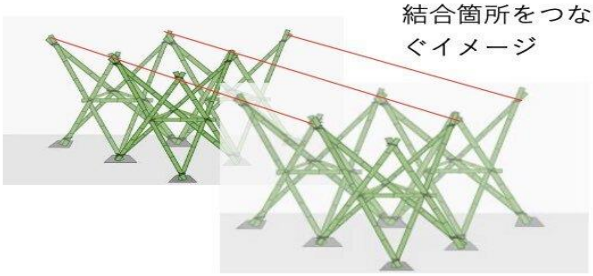
【図2】



3ユニットを繋げることでより安定した形状の自立式構造体をつくる。

さらに、同じ構造体をもう1つ作り、並行に設置し、互いを竹で連結。

結合箇所をつなぐイメージ

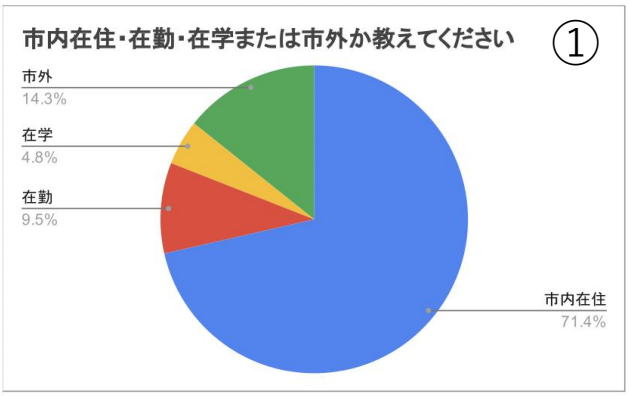


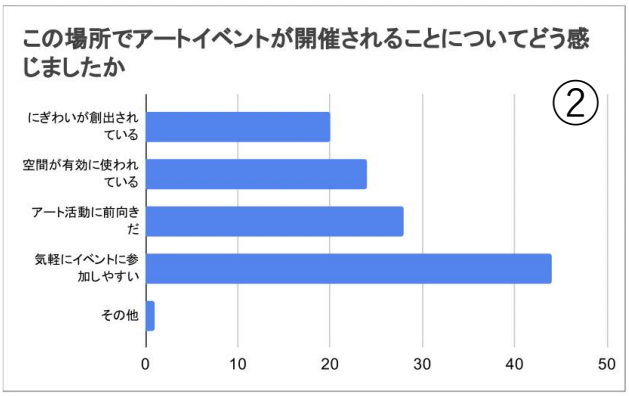
５．Slow Art Collective Chiba 参加方法

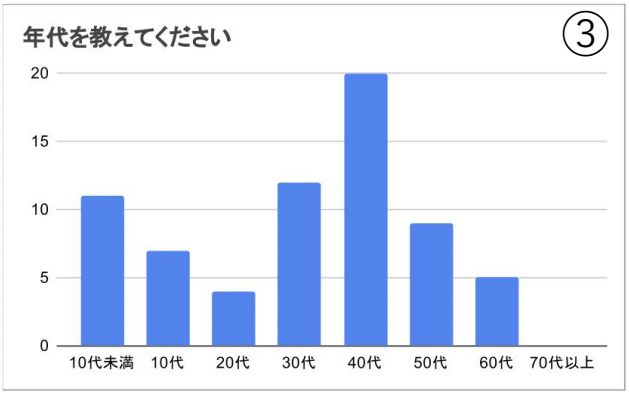
1. みて参加｜アート作品が立ち上がる瞬間をみてみよう：3/24（日）～3/26（火）10:00～19:00
2. つくって参加｜カラフルな紐をあみあみしよう：3/27（水）～4/7（日） 10:00～19:00

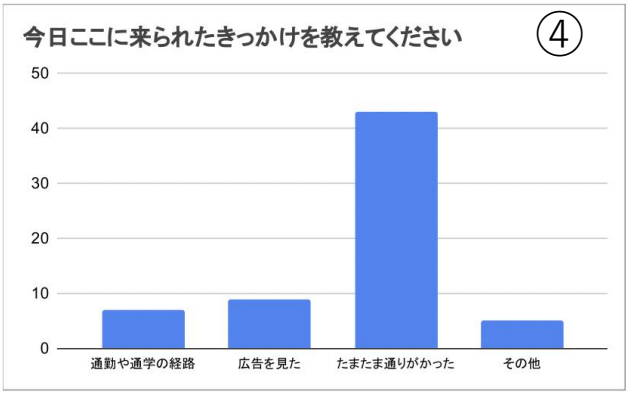
※アーティストや経験豊かなスタッフが常駐し、市民の皆様と一緒に制作を行います。手ぶらで気軽にお楽しみいただけます。

6．アンケート回答結果　＊取得数 62（紙面・QRコードによる取得）









◉欄外に書かれた感想（参加者の自発的な記載）

・めっちゃ参加するの楽しくてめっちゃいいです！！
・楽しい！！
・3.4年過ごしているけど、ここで、イベントが開催されているのはあまり見ない。12月のクリスマスの時期にツリーがあるくらいのイメージ
・楽しかったよありがとうございました
・色々紐があって楽しかった。
・ただ見るだけでなく、参加することで楽しめる
・とても楽しかったしキレイだったです
・子供が楽しめてよかったです
・子供が楽しそうに見て、触っていて良い時間となりました。ありがとうございます。
・子供が楽しみながらアートに触れることができて良かったです。
・年齢に関係なく楽しめてよい
・いろあざやかになった
・「自由」をためらわず現せてシンプルにたのしかったです。私も参加者のひとりということで。光栄におもいます。
・おもしろかったです。色々な結び方があって、どう在ってもいいんだなと思いました。世の中がこうだったら（どう在ってもよい）いいのになと思います。

７．令和５年度実施の振り返り

・普段は通路として利用している場の風景が、アーティストのアートプロジェクトで日々変容していく様を目の当たりにし、通りがかりや空いた時間に足を止め、スタッフの誘導も相まって、幼児から高齢者まで気軽に参加できる本プロジェクトは、「アート」へのハードルを下げる意味でも効果が高いと思われる。

・実際に会場では、スタッフと参加者の交流が生まれ、2週間の会期の中でリピーターも多く来場した。自宅に眠っている帯締めや紐の提供してくれる方もいらっしゃったりと、短期間ながら主体的に関わってくださる参加者が現れたことも評価できる。

・千葉駅周辺で行う芸術祭の初企画として、センシティ1Fの通路で実施した。市民参加型のアートプロジェクトを主眼におき、市内の企業連携もプロジェクトの柱とする本芸術祭にとって、市民やワーカーが忙しく行き交う同会場で実施することは、本会期に向けた導入企画として戦略的にも大きな意図があった。

・「『自由』をためらわず表せてよかった。」「色々な結び方があって、どう在ってもいいんだなと思いました。世の中がこうだったら（どう在ってもよい）いいのになと思います。」など、紐を結ぶというシンプルな構造の本プロジェクトに参加することで、このような深いコメントが引き出せたことも大きな収穫であった。

・最終日を迎えたインスタレーションは、紐が蔦の役割をするジャングルのような様相で、アーティストからも千葉市の市民の人懐っこさ、創造するパワーは驚くべきものだったのコメントがあった。同様に、東京で同プロジェクトを推進してきた現場スタッフ達からも同じ意見が出ている。

・最後に、同エリアでのプロジェクトの実施にあたっては、人通りの多さと安全対策等の面から、当初不可能であるとの見方も多かった。しかしながら、市の文化振興課をはじめ、都市局担当者がセンシティ様への橋渡しを担い、会場前方に位置するそごう千葉店からの最大限のバックアップもあって実現した。そごう千葉店の担当者様は、社内の全従業員に情報提供するとともに、店舗のウェブサイトにも情報を掲載。更には近隣の保育園・幼稚園にも手配りでチラシを配布して下さるなど、心強いサポーターとなった。

・プレ期間ということもあり、SNSやWeb等が整備されていない中で、本プロジェクトのように日々作品が変化し、インスタレーションが日々成長していく過程を発信できなかったのは残念であった。

８．今後の展開に向けた検討

・令和7年度の本会期にて、再び本プロジェクトの実施を視野にいれており、その際は広報戦略的にも適宜情報を届けられるような仕組みを検討したい。また今後は更に自由度が高く、自然光や風の通る会場や屋外で実施することも検討していきたい。

9. 記録写真

※撮影：ゆかい（ただ）

1. 制作物

［千葉国際芸術祭ラウンドテーブル01「なぜ千葉市に芸術祭が必要なのか？」チラシ 5,000枚 ］

（表）

千葉国際芸術祭ラウンドテーブル 01
「なぜ千葉市に芸術祭が必要なのか？」

2025 年度に本会期を迎える「千葉国際芸術祭 2025」は、千葉市のまちなかに内在する自然・文化・人材・歴史などの地域の宝をアートと繋ぎ、千葉市の将来を見据えた「人づくり」「まちづくり」「未来づくり」を目指す市民参加型の芸術祭です。
このたび千葉国際芸術祭 2025 のキックオフイベントとして、本芸術祭の総合ディレクターをはじめ、芸術、行政から登壇者を迎えたラウンドテーブル型のトークイベントを開催いたします。
本イベントでは、登壇者が立場の隔てなく意見交換を行い、様々な領域で活躍する市民や企業も参加します。「なぜ千葉市に芸術祭が必要なのか」という問いを軸にそれぞれの立場から思いを語るとともに、千葉市の文化芸術の振興から文化芸術によるまちづくりまで、深く意見交換を行います。

登壇者プロフィール

中村 政人　（千葉国際芸術祭 総合ディレクター）
1963 年生まれ。アーティスト。東京藝術大学絵画科教授・副学長。「アート × コミュニティ × 産業」の新たな繋がりを生み出す社会彫アーティスト。
全国で地域再生型アートプロジェクトを展開し、2010 年民設民営の文化施設「アーツ千代田 3331」を創設。2020 年より「東京ビエンナーレ」の総合ディレクターを努める。平成 22 年度芸術選奨受賞。2018 年日本建築学会文化賞受賞。

藤 浩志　（アーティスト）
1960 年生まれ。京都市立芸術大学卒業。同大学大学院を修了後、86 年から 2 年間、青年海外協力隊員としてパプアニューギニア国立芸術学校に勤務し、美術を指導。日常に転っている不要なおもちゃを持ち寄り交換する「みんっこ」といったプロジェクトを長年にわたって行ってきた。
2014〜16 年まで十和田市現代美術館館長。現在、秋田公立美術大学美術学部美術学科教授。

山梨 絵美子　（千葉市美術館館長）
1958 年生まれ。東京大学文学部考古学科、同大学院修了。1984 年に東京国立文化財研究所の研究員となり、独立行政法人化以降も同研究所にて広報代表理事や調査研究室に携わってきた。現在は、日本博物館協会会長、全国美術館会議理事、独立行政法人東京文化財研究所客員研究員、東京都美術館運営委員会委員や千葉県文化財審議会委員を務めている。
専門分野は日本近代美術史で、高橋由一、小林清親、黒田清輝などについての著作がある。

神谷 俊一　（千葉市長）
1973 年生まれ。東京大学経済学部卒業後、旧自治省（現総務省）に入省。在ロルダン日本国大使館、千葉市副市長等を経て、2021 年に千葉市長に初当選。副市長時代より、企業立地施策や産業用地整備で成果を上げるほか、市長就任後には、世界最大のアクションスポーツ競技会「X Games」の日本初誘致の実現や、県内で初めて環境省の脱炭素先行地域指定の選定を受けるなど、先駆的施策にリーダーシップと調整力を発揮。

千葉国際芸術祭ラウンドテーブル 01
「なぜ千葉市に芸術祭が必要なのか？」
2024 年 2 月 28 日（水）
10:30〜12:00（開場 10:00）
定　員：70 名　当日先着
会　場：千葉市美術館 さや堂ホール（1F）
（千葉県千葉市中央区中央 3-10-8）
主　催：千葉国際芸術祭実行委員会
問合せ先：千葉国際芸術祭実行委員会事務局
（千葉市市民局生活文化スポーツ部文化振興課）
メール bunka.CIL@city.chiba.lg.jp
電話 043-245-5961

（裏）

配架先：市内公共施設（市美術館、区役所、コミュニティセンター、図書館等）

［西尾美也ワークショップ「くふぅく」／栗原良彰ワークショップ「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」チラシ　＊片面づつ、裏表で制作 5000枚制作 ］

配架先：市内公共施設（市美術館、区役所、コミュニティセンター、図書館等）
千葉市美術館近隣　小学校４校（鶴沢、弁天、本町、院内）

[藤 浩志「かえっこ in 花見川」＊用途に応じて複数パターン作成]

◉当日配布用のチラシ（データを商店街様にお渡し）

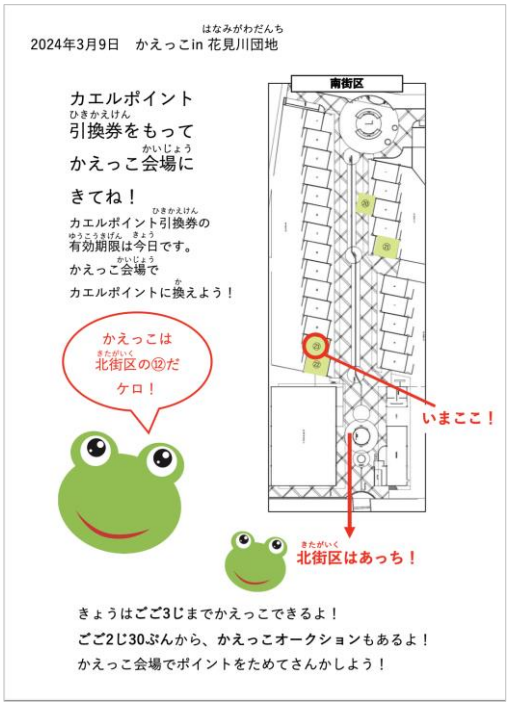
（表）

（裏）

配架先：市美術館、花見川団地近隣小学校（２校）、保育園（１園）、幼稚園（３園）、
保育所（３園）

◉北街区用_カエルポイント引換券を貰った人への案内

◉南街区用_カエルポイント引換券を貰った人への案内

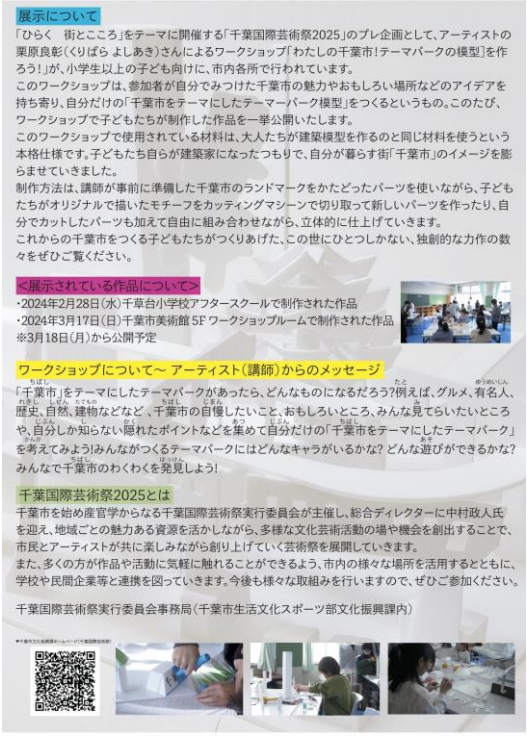


◉カエルポイント引換券

[「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」みんなの作品発表会！]

◉チラシ・パネル

（チラシ・パネル）



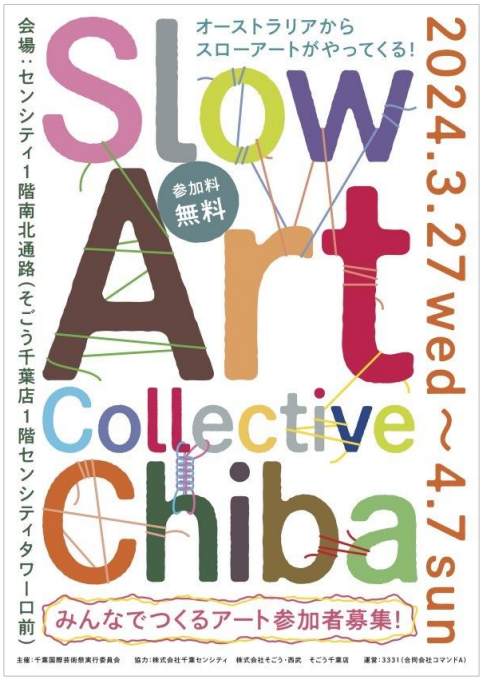
（展示パネル）

◉展示用ショートムービー（2分）

［「わたしの千葉市！テーマパークの模型を作ろう！」千草台アフタースクール用チラシ］

チラシ（片面のみ）
※千草台小学校に特化して配布

［「 Slow Art Collective Chiba 」チラシ 6,000枚制作］



（表）

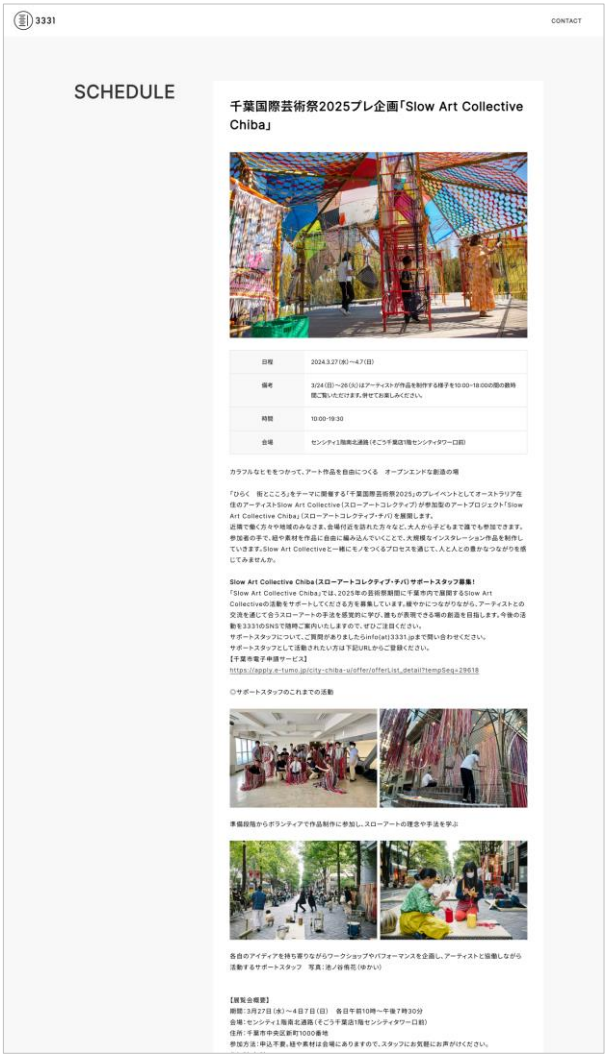
（裏）

配架先：市内公共施設（市美術館、区役所、コミュニティセンター、図書館等）
そごう近隣幼稚園、保育園等

2. ウェブサイト
※プレ期間の為、千葉市並びにコマンドA（3331）のウェブサイトを使用した情報発信

千葉市ウェブ：「千葉国際芸術祭」の情報ページ（トップ）

千葉市ウェブ：「千葉国際芸術祭」の情報ページ（イベント情報）



3331ウェブ：「 Slow Art Collective Chiba 」の情報掲載ページ

3. SNS　※千葉市、並びに合同会社コマンドA（3331）のSNSを使用した告知

千葉市SNS 「LINE」記事

千葉市SNS 「Facebook」記事

千葉市SNS 「Facebook」記事

3331（コマンドA）SNS
「Instagram」記事

3331（コマンドA）SNS
「Facebook」記事

3331（コマンドA）SNS
「Facebook」記事

3331（コマンドA）SNS
「X」記事

参考：3331公式SNS（合同会社コマンドA運営）全体のフォロワー数
合計６万人

・Facebook　フォロワー数　2.1万人
・X（旧twitter）フォロワー数　2.7万人
・Instagramフォロワー数　1.2万人

Facebook

X（旧twitter）

Instagram

4. 情報発信まとめ

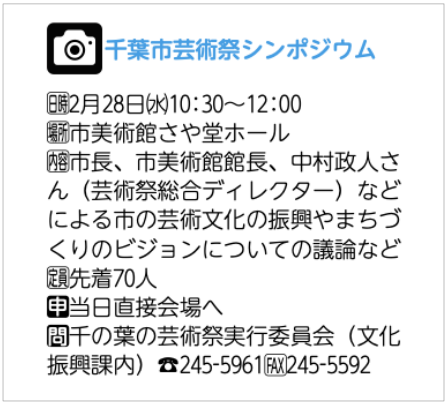
◉「2月28日ラウンドテーブル01」
・千葉市ホームページでの情報掲載
・千葉市内文化施設・公民館・図書館93件／全国の美術館（選抜）50件）
・千葉市 「ちば市政だより2月号」掲載
・千葉市 bayfmラジオ広報番組「ベイモーニンググローリー」での情報発信
・千葉市各種SNSでの情報発信（Facebook、X、Line）
・コマンドA（3331）各種SNSでの情報発信（Facebook、Instagram、X）

◉「3月9日 かえっこ in 花見川」
・千葉市ホームページでの情報掲載
・「ちいき新聞（地域新聞社）」への情報掲載
・千葉市 「ちば市政だより3月号」掲載

◉「3月16日 西尾WS・17日 栗原 WS 」
・千葉市ホームページでの情報掲載
・千葉市内文化施設・公民館・図書館93件／全国の美術館（選抜）50件）※ラウンドテーブルと同送
・千葉市美術館（会場）近隣小学校4校にチラシの特別発送
・千葉市 「ちば市政だより3月号」掲載
・千葉市各種SNS（Facebook、X、Line）掲載
・コマンドA（3331）各種SNSでの情報発信（Facebook、Instagram、X）

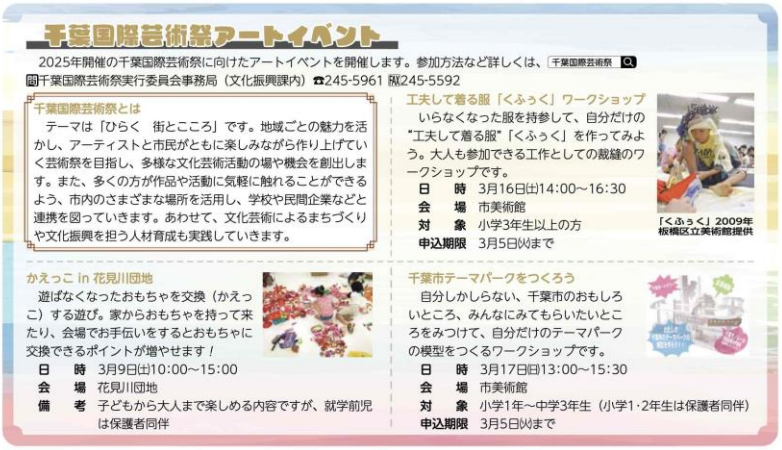
◉「3月13日～21日 テーマパーク模型発表会」
・千葉市ホームページでの情報掲載
・参加者に向けた告知

◉「3月27日～4月7日 Slow Art Collective Chiba 」
・千葉市ホームページでの情報掲載
・千葉市内文化施設・公民館・図書館108件）
・千葉市各種SNSでの情報発信（Facebook、X、Line）
・コマンドA（3331）各種SNSでの情報発信（Facebook、Instagram、X）


千葉市芸術祭シンポジウム

日時 2月28日(水)10:30～12:00
場所 市美術館さや堂ホール
内容 市長、市美術館館長、中村政人さん（芸術祭総合ディレクター）などによる市の芸術文化の振興やまちづくりのビジョンについての議論など
定員 先着70人
申 当日直接会場へ
問 千の葉の芸術祭実行委員会（文化振興課内）☎245-5961 FAX245-5592

「ちば市政だより 2月号 」掲載ページ


千葉国際芸術祭アートイベント

2025年開催の千葉国際芸術祭に向けたアートイベントを開催します。参加方法など詳しくは、千葉国際芸術祭
問 千葉国際芸術祭実行委員会事務局（文化振興課内）☎245-5961 FAX245-5592

千葉国際芸術祭とは
テーマは「ひらく　街とこころ」です。地域ごとの魅力を活かし、アーティストと市民がともに楽しみながら作り上げていく芸術祭を目指し、多様な文化芸術活動の場や機会を創出します。また、多くの方が作品や活動に気軽に触れることができるよう、市内のさまざまな場所を活用し、学校や民間企業などと連携を図っていきます。あわせて、文化芸術によるまちづくりや文化振興を担う人材育成も実践していきます。

工夫して着る服「くふぅく」ワークショップ
いらなくなった服を持参して、自分だけの“工夫して着る服”「くふぅく」を作ってみよう。大人も参加できる工作としての裁縫のワークショップです。
日　時　3月16日(日)14:00～16:30
会　場　市美術館
対　象　小学3年生以上の方
申込期限　3月5日(火)まで
「くふぅく」2009年 板橋区立美術館提供

かえっこ in 花見川団地
遊ばなくなったおもちゃを交換（かえっこ）する遊び。家からおもちゃを持って来たり、会場でお手伝いをするとおもちゃに交換できるポイントが増やせます！
日　時　3月9日(日)10:00～15:00
会　場　花見川団地
備　考　子どもから大人まで楽しめる内容ですが、就学前児は保護者同伴

千葉市テーマパークをつくろう
自分しかしらない、千葉市のおもしろいところ、みんなにみてもらいたいところをみつけて、自分だけのテーマパークの模型をつくるワークショップです。
日　時　3月17日(日)13:00～15:30
会　場　市美術館
対　象　小学1年～中学3年生（小学1･2年生は保護者同伴）
申込期限　3月5日(火)まで

「ちば市政だより 3月号 」掲載ページ

5. 取材

◉2/28実施「ラウンドテーブル」
・千葉日報

◉2/28実施「栗原良彰WS 千草台小学校アフタースクール」
・読売新聞

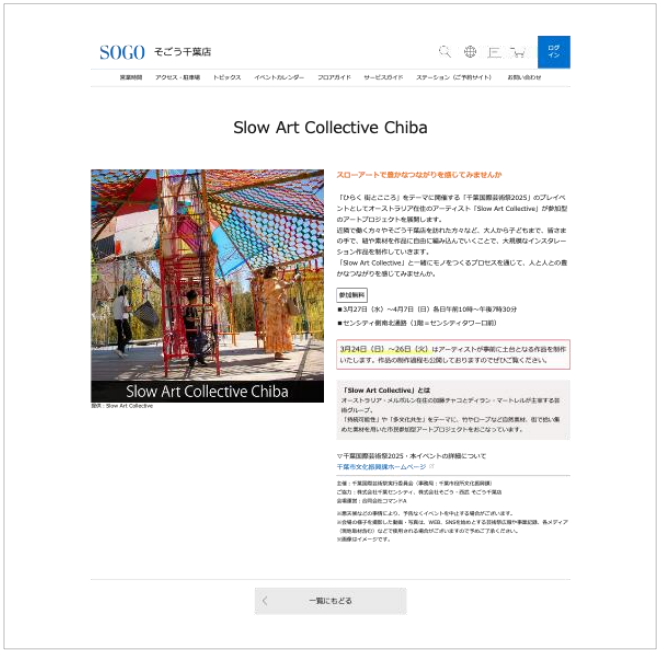
◉3/16実施「くふぅく」
・コミュニティーチャンネル（11ch）「ジモトトピックス」JCOM株式会社（ケーブルテレビ）

◉3/27～4/7「 Slow Art Collective Chiba 」
・東京新聞
・千葉日報

6. 企業様による広報協力

◉千葉センシティ様
・「 Slow Art Collective Chiba 」の情報（チラシ）をテナント様向けサイトに掲載し発信頂く
※センシティ様入居店舗数71社　1,700人～2,000人への情報発信

◉そごう千葉店様
・「 Slow Art Collective Chiba 」チラシ3000枚を近隣の幼稚園・保育園に手持ちで直接配布頂く
・「 Slow Art Collective Chiba 」の情報をそごう千葉店様ホームページにご掲載頂く
・「 Slow Art Collective Chiba 」の情報を従業員様に向けて配信して頂く
ほか



「そごう千葉店」ウェブサイト 掲載ページ